一般社団法人 日本独文学会
JAPANISCHE GESELLSCHAFT FÜR GERMANISTIK E.V.

ニュースレター2021 秋号

JGG-INFO-BLATT / HERBST 2021

まえがき

会員の皆様

2021 年 6 月に選出された理事会での最初の Info-Blatt となります。コロナ禍で対面の活動ができないまま 1 年半が過ぎました。2021 年秋の研究発表会もまたオンラインとなります。2022 年春の研究発表会は対面で開催できることをただただ願うばかりです。

今回発足した理事会では，理事会活動のスリム化を方針とし，様々な負担軽減に取り組んで参ります。学会員数の減少継続，ドイツ語専任ポストの減少など，基本的な母体が縮小する中で，学会に関連する活動はむしろ増加傾向にあり，最高でもわずか 40 票程度，10 票程度でも理事に選ばれてしまうような中で，特定の会員に異常な負担がのしかかるような状況は改善される必要があります。持続可能な学会活動のためには，その見直し，合理化などを進めることはもはや不可避であると考えます。

通常のルーティーン業務と並んで，具体的には次のことを今理事会では課題としています。

1）研究発表会開催頻度検討
2）各種申し込み・手続きオンライン化検討
3）若手支援担当理事ポスト創設の検討

また，前回理事会からの継続事項として，

5）学会誌欧文誌の紙媒体廃止・完全オンライン化の実施
6）学会誌和文誌への学会関係諸報告掲載の復活実施
7）ハラスメント対応体制の検討

至らないところも多いかと思いますが，これらの方針へのご理解と協力をお願い申し上げます。

会長　井出万秀

目次

まえがき 2
2021 年秋季研究発表会について 4
2022 年春季研究発表会のご案内 5
Bekanntmachung der Frühlingstagung 2022 6
研究会開催のための会場借用について 7
Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung 2022 8
学会当日の受付用机・椅子の借用について 9
Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung 2022 10
第 20 回日本独文学会・DAAD 賞選考への応募について 11
第 62 回ドイツ文化ゼミナール開催のご案内 13
Ankündigung des 62. Kulturseminars 15
第 26 回ドイツ語教授法ゼミナール開催のご案内 22
Ankündigung des 26. DaF-Seminars der JGG 24
2021 年度ドイツ語論文執筆ワークショップ開催のご案内 28
DAAD 奨学金についてのご案内 30
DAAD-Stipendienprogramme 32
ゲーテ・インスティトゥートからのお知らせ 34
会費納入について 37
一般社団法人日本独文学会会費規程 38
第 18 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告（日本語部門） 40
第 18 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告（ドイツ語部門） 43
日本独文学会 2021 年春季研究発表会報告 48
2020 年度ドイツ文化ゼミナール・オンライン代替企画報告 49
第 25 回ドイツ語教授法ゼミナール報告 56
2020 年度ドイツ語教員養成・研修講座報告 62
日本独文学会研究叢書既刊一覧 64
支部報告 65
ドイツ語教育部会報告 72
2021 年度岩﨑奨学金（出版助成）について 74
あとがき 76

2021 年秋季研究発表会について

2021 年の秋季研究発表会は，東北支部の担当で東北大学にて 10 月 2 日（土），3 日（日）に開催の予定であったが，新型コロナウイルスの感染拡大の状況に鑑み，2021 年春季研究発表会と同様に Zoom によるオンラインにて開催されることとなった。シンポジウム 2 本，口頭発表 10 本，ブース発表 2 本，ポスター発表 2 本が予定されている。学会員の参加費は無料，非学会員の参加費は 1,000 円となる。

企画担当

2022 年春季研究発表会のご案内

下記の通り，2022 年春季研究発表会を開催いたします。

期 日： 2022 年 5 月 7 日（土），8 日（日）

会 場： 立教大学池袋キャンパス

〒171-8501　東京都豊島区西池袋 3-34-1
https://www.rikkyo.ac.jp/access/ikebukuro/

研究発表をご希望の方は「発表申込書１（申込者情報）」（Excel 形式）をダウンロードし，「発表申込書２（発表概要）」（Word 形式）と共に，日本独文学会ホームページ (https://www.jgg.jp/) 左メニュー「研究発表申し込み」にアクセスし，「発表申し込みフォーム」よりお申込みください。その際，必ず「研究発表申し込み要領（2020 年 2 月 1 日改訂）」をご熟読ください。申し込み審査のガイドラインもそこに記載されています。

申し込み締め切り： **2021 年 12 月 5 日（日）**

申し込み先： **上記発表申し込みフォーム**

2021 年 9 月

日本独文学会理事会

Bekanntmachung der Frühlingstagung 2022

Die Frühlingstagung der JGG findet statt:

am Sa., 7. und So., 8. Mai 2022

an der Rikkyo Universität Tokyo, Ikebukuro-Campus

Nishi-Ikebukuro 3-34-1, Toshima-ku, 171-8501 Tokyo, Japan

https://www.rikkyo.ac.jp/access/ikebukuro/

Wenn Sie sich als Referent/in bewerben möchten, senden Sie uns bitte das ausgefüllte Antragsformular (Excel-Datei) und Ihr Exposé in Form einer selbst verfassten Word-Datei. Um sich anzumelden laden Sie bitte beides unter Anmeldeformular（発表申し込みフォーム） auf der JGG-Webseite hoch.

Detaillierte Informationen sowie alle notwendigen Upload- und Download-Links finden Sie unter Referatsanträge im linken Menü auf der JGG-Webseite (https://www.jgg.jp/).
Der deutsche Text folgt dem Japanischen.

Anmeldefrist: **So., 5. Dezember 2021**

Anmeldung unter: siehe oben

September 2021

Vorstand der JGG

研究会開催のための会場借用について

2022 年春季研究発表会の折に研究会開催のための会場の借用をご希望の場合は，下記の要領でお申し込みくださいますようお願いいたします。

記

１）申し込み方法

必要事項をご記入のうえ，　学会ホームページ上 (https://www.jgg.jp/)「研究会開催のための会場借用申し込み」フォームよりお申し込みください。なお，会場および開催形式の関係で，すべてのご希望には添えない場合がございます。

申し込み期限：**2021 年 12 月 5 日（日）**

２）会場借用の時間帯

借用可能な時間帯は，学会 2 日目 5 月 8 日（日）の午後（13:15～16:00）です。

３）会場使用料

教室の使用に際しましては一定の使用料をいただくことになります。料金については，使用教室のご案内とともに，日本独文学会事務局より開催約 1 ヶ月前にお知らせします。

◎ 商行為を行うことはできません。

◎ 詳細は研究会責任者にご連絡いたします。

2021 年 9 月

日本独文学会理事会

Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung 2022

Vereinen oder Arbeitsgruppen der JGG kann auf Wunsch bei der JGG-Frühlingstagung 2022 ein Raum zur Verfügung gestellt werden. Bei Interesse melden Sie sich bitte rechtzeitig im Büro der JGG! Aus Gründen der begrenzten Anzahl der zur Verfügung gestellten Räume und je nach Gegebenheiten des Veranstaltungsortes können unter Umständen nicht alle Wünsche berücksichtigt werden oder es kann Einschränkungen geben. Bei der Raumbenutzung muss der Antragsteller mit entstehenden Kosten rechnen.

Anmeldefrist: **So., 5. Dezember 2021**

Das Anmeldeformular finden Sie auf der JGG-Webseite (https://www.jgg.jp/) bei **Tagungen** unter dem Punkt Zur Beantragung der Raumbenutzung bei der JGG-Frühlingstagung.

Bitte beachten Sie:

- Geschäftliche Transaktionen sind nicht gestattet.

- Sie werden nach Bearbeitung Ihres Antrags etwa einen Monat vor Tagungsbeginn über Einzelheiten wie z. B. Informationen zu den Räumen und entstehende Gebühren benachrichtigt.

September 2021

Vorstand der JGG

学会当日の受付用机・椅子の借用について

2022 年春季研究発表会の会場において，受付用に机・椅子の借用をご希望の場合は，下記の要領でお申し込みくださるようお願いいたします。なお，会場および開催形式の関係で，すべてのご希望には添えない場合がございます。

記

申し込み方法

学会ホームページ上の「学会当日の受付用机・椅子の借用申し込み」フォームよりお申込みください。

申し込み期限：**2021 年 12 月 5 日（日）**

◎ 商行為を行うことはできません。

◎ 詳細は団体・研究会の責任者にご連絡いたします。

2021 年 9 月

日本独文学会理事会

Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung 2022

Vereine oder Arbeitsgruppen der JGG können auf der JGG-Frühlingstagung 2022 einen Infostand (mit Stühlen) aufstellen. Bei Interesse melden Sie sich bitte rechtzeitig im Büro der JGG! Aus Platzgründen und je nach Gegebenheiten des Veranstaltungsortes können unter Umständen nicht alle Wünsche berücksichtigt werden oder es kann Einschränkungen geben.

Anmeldefrist: So., 5. Dezember 2021

Das Anmeldeformular finden Sie im linken Menü auf der JGG-Webseite (https://www.jgg.jp/) bei **Tagungen** unter dem Punkt Zur Beantragung von Infotischen auf der JGG-Frühlingstagung.

Bitte beachten Sie:

- Geschäftliche Transaktionen sind nicht gestattet.
- Nach Bearbeitung der Anmeldung wird der Antragsteller über die Einzelheiten benachrichtigt.

September 2021

Vorstand der JGG

第 20 回日本独文学会・DAAD 賞選考への応募について

第 20 回日本独文学会・DAAD 賞の選考対象業績を下記の要領により募集します。ふるってご応募ください。

記

1　選考対象

日本独文学会員が執筆し，2021 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに刊行ないし印刷公表されたドイツ文学，ドイツ語学，ドイツ語教育，ドイツ語圏の文化・社会等に関する研究書および論文。自薦，他薦は問わない。なお，日本独文学会機関誌に掲載の論文は自動的に選考の対象となる。

2　部門と選考

次の部門ごとに設けられた選考委員会が，選考にあたる。

日本語研究書部門
ドイツ語研究書部門
日本語論文部門
ドイツ語論文部門

3　年齢制限

日本語研究書部門およびドイツ語研究書部門では特に年齢制限を設けないが，日本語論文部門およびドイツ語論文部門についてはドイツ語学文学振興会賞との重複を避けるため，論文の印刷公表年の 12 月 31 日現在で 36 歳以上の執筆者の論文に限る。

4　応募方法

当該の研究書または論文の原本 1 部を，論文の場合は執筆者の生年月日を明記の上（他薦の場合で生年月日が不明なら，その旨を記すこと）下記宛てに 2022 年 3 月 31 日までに送付する。封筒には「学会賞応募」と朱書すること。

日本独文学会
〒170−0005　東京都豊島区南大塚 3−34−6−603
Tel: 03-5950-1147

5　選考結果の発表

2022 年度末頃に学会ホームページで公表する。

6　授賞件数

日本語研究書部門・ドイツ語研究書部門： それぞれ 1 件程度　日本語論文部門・ドイツ語論文部門： それぞれ 2 件程度

7　授賞式

授賞式において，受賞者に賞状と副賞を授与する。 授賞式は 2023 年春季研究発表会において行う。

第 62 回ドイツ文化ゼミナール開催のご案内

第 62 回ドイツ文化ゼミナールをドイツ学術交流会（DAAD）との共催で，下記のとおり開催いたします。発表・討議はドイツ語で行います。

第 62 回ドイツ文化ゼミナールは，本来，2020 年 3 月に開催予定でした。周知の通り COVID-19 の世界的蔓延のため 2020 年 3 月は中止のやむなきに至りました。代替企画として 2021 年 3 月に Online-Alternative を開催し，招待講師による講演および研究発表とそれに続く Diskussion を行いました。

今回実施予定の第 62 回ドイツ文化ゼミナールでは講演・研究発表も行いますが, Online-Alternative では実施できなかった Gruppenarbeit により重点を置きます。今回は Phantastik の理論についての Gruppenarbeit を追加します。合わせて今回の文化ゼミナールは通常よりも一日短くなることをお知らせします。皆さんの積極的な参加を期待しています。

なお，COVID-19 の蔓延状況によりましてはオンライン開催のような代替企画に変更せざるを得ない可能性があることをご理解いただければ幸いに存じます。

記

テ ー マ：Phantastische Literatur（詳細は下記の Themenbeschreibung を参照）
招待講師：ハンス・リヒァルト・ブリットナッハー教授（ベルリン自由大学）
会　　期：2022 年 3 月 13 日（日）－17 日（木）
会　　場：リゾートホテル蓼科（旧アートランドホテル蓼科）
http://resort-hotel-tateshina.jp
参 加 費：40,000 円程度（学生・院生・非常勤職の方には参加費補助があります）
定　　員：40 名程度
申込締切：2021 年 10 月 17 日（日）

参加ご希望の方は 2021 年 10 月 17 日（日）までに， E メールか葉書で日本独文学会にお申し込みください。

1. E メールの場合：下記の申込フォームをダウンロードし，必要項目をご記入の上，メールに添付して kulturseminar62[at-mark]jgg.jp にご送付ください。

⇒【申込フォーム】:
https://www.dropbox.com/scl/fi/zigfvnsmdc48r1jz05j2q/Anmeldeformular_62.xlsx?dl=0&rlkey=xkqw9uuqra3ee9lb8i4v3t5hs

2. 葉書の場合：裏面に「文化ゼミ参加希望」と朱書の上，氏名，所属機関，現職（参加費補助の関係上，学生・院生および常勤職のない方はその旨を明記），住所（漢字・ローマ字併記），電話番号，メールアドレスを次の宛先にご送付ください：
〒170-0005 東京都豊島区南大塚 3-34-6 南大塚エースビル 603　日本独文学会

日本独文学会会員以外の方が申し込む際は日本独文学会会員（学生・院生の場合は指導教員）の紹介が必要です。紹介者の氏名をお知らせください。また他に略歴，参加希望理由（400 字程度），業績リスト（研究業績がある方）を申し込み時に提出してください。非学会員の参加費は 50,000 円程度です。

なお，参加は原則として申し込み順に受け付けますが，最終的な選考は理事会にお任せください。

研究発表希望：ドイツ語による 30 分程度の発表を希望される方は，題目および要旨（独文 400 語以内）に簡単な履歴を添えて，2021 年 10 月 17 日（日）までに実行委員会（kulturseminar62[at-mark]jgg.jp）にお申し出ください。なお，発表者の決定は実行委員会に御一任願います。

実行委員会は，すべての参加者に快適な学会滞在と，実りある学術的な議論を可能にする生産的な研究環境を整えるために努力します。これらはいうまでもなく参加者相互の敬意と信頼の上に成り立つものです。文化ゼミナールはそれゆえ，いかなる言葉による嫌がらせも，性的ハラスメントも，参加者個人の人格を毀損するような言動も許しません。

日本独文学会・ドイツ文化ゼミナール実行委員会

Eberhard Scheiffele　Marcus Conrad　Thomas Schwarz　磯崎康太郎
（委員長）桑原聡　下薗りさ　森口大地　若山真理子　Manuela Sato-Prinz（DAAD）

Ankündigung des 62. Kulturseminars

In Zusammenarbeit mit dem DAAD wird vom 13. bis 17. März 2022 in Tateshina das 62. Kulturseminar veranstaltet. Vorträge und Diskussionen werden in deutscher Sprache gehalten bzw. durchgeführt.

Durch eine rasche Ausbreitung der Corona-Epidemie 2020 in der ganzen Welt sah sich das Organisationskomitee gezwungen, das 62. Tateshina-Seminar, das ursprünglich für den März 2020 vorgesehen war, abzusagen. Als eine Ersatzveranstlatung haben wir eine Online-Alternative im März 2021 durchgeführt, in der Vorträge mit einer jeweils anschließenden Diskussion gehalten wurden.
Im 62. Kulturseminar, das im März 2022 stattfinden wird, wird es sich weniger um Vorträge handeln als um Gruppenarbeit. Eine Gruppenarbeit über die Theorie der Phantastik wird neu hinzugefügt. Außerdem möchten wir Sie darauf aufmerksam machen, dass das Programm um einen Tag kürzer werden wird als sonst. Alle interessierten Mitglieder der JGG sind dazu herzlich eingeladen.
Allerdings möchten wir Sie im Voraus um Verständnis für die Möglichkeit bitten, dass durch die Ausbreitung der Corona-Epidemie die Veranstaltung des Seminars nicht möglich sein könnte, so dass eine Ersatzveranstalung in Form einer Online-Alternative in Erwägung gezogen werden müsste.

Rahmenthema: Phantastische Literatur (s. u. die Themenbeschreibung)
Gastdozent: Prof. Dr. Hans Richard Brittnacher (Freie Universität Berlin)
Datum: So., 13. März – Do., 17. März 2022
Ort: Resort Hotel Tateshina (Chino, Präfektur Nagano)
http://resort-hotel-tateshina.jp
Teilnahmegebühr: voraussichtlich 40.000 Yen (Zuschussmöglichkeit für Teilnehmer/innen ohne feste Anstellung)
Erwartete Teilnehmerzahl: ca. 40
Anmeldeschluss: 17. Oktober 2021

Für die Anmeldung bitte unten stehendes Anmeldeformular herunterladen und ausfüllen, und senden Sie es als Attachment einer E-Mail mit dem Betreff „ANMELDUNG TATESHINA“ an: kulturseminar62[at-mark]jgg.jp

Anmeldeformular: Bitte das Anmeldeformular herunterladen:
https://www.dropbox.com/scl/fi/zigfvnsmdc48r1jz05j2q/Anmeldeformular_62.xlsx?dl=0&rlkey=xkqw9uuqra3ee9lb8i4v3t5hs

Eine Anmeldung per Post ist auch möglich. Senden Sie bitte eine Postkarte mit dem roten Vermerk „ANMELDUNG TATESHINA“ und Ihren persönlichen Daten (Name, Institution, berufliche Position, Anschrift, Telefonnummer, E-Mail-Adresse) an die Anschrift:
Japanische Gesellschaft für Germanistik
Minami Otsuka 3-34-6-603
Toshima-ku, 170-0005 Tokyo

Studierende bzw. Doktoranden und Teilnehmer/innen ohne feste Anstellung können einen Zuschuss von 10.000 Yen beantragen. Bitte teilen Sie uns ausdrücklich mit, wenn dies für Sie zutrifft.
Bei einer Bewerbung von einem Mitglied eines germanistischen Verbandes in China, Korea und Taiwan sind zusätzlich der akademische Werdegang und die Liste der wichtigsten Publikationen beizulegen. Die Teilnahmegebühr für Mitglieder genannter Verbände aus diesen Ländern entspricht der der JGG-Mitglieder: 40.000 Yen.
Für eine Bewerbung von einem Nicht-Mitglied der JGG bzw. der oben genannten Verbände ist die Empfehlung eines JGG-Mitgliedes (bei Studierenden ihrer/es Betreuerin/s) erforderlich. Zusätzlich sind der akademische Werdegang, ein Motivationsschreiben (ca. 150 Wörter) und die Liste der wichtigsten Publikationen (wenn vorhanden) beizulegen. Die Teilnahmegebühr beträgt 50.000 Yen.
Da die Teilnehmerzahl begrenzt ist, werden die Anmeldungen in der Reihenfolge ihres Eingangs berücksichtigt. Die endgültige Entscheidung über die Teilnahme behält sich der Vorstand der JGG vor.

Call for Abstracts: Das Seminar bietet die Gelegenheit zur Präsentation von Vorträgen (ca. 30 Min.). Bitte schicken Sie bis zum 17. Oktober 2021 Ihr Resümee (max. 400 Wörter) an das Organisationskomitee: kulturseminar62[at-mark]jgg.jp
Das Komitee behält sich vor, wenn nötig, aus den eingereichten Resümees eine Auswahl zu treffen.

Das Organisationskomitee bemüht sich um die Gewährleistung produktiver Arbeitsbedingungen, die allen Teilnehmern einen angenehmen Aufenthalt auf der Tagung

und ertragreiche wissenschaftliche Diskussionen ermöglichen. Diese basieren freilich ganz entscheidend auf gegenseitigem Respekt und Vertrauen. Nicht geduldet in unserem Kulturseminar werden daher verbale und sexuelle Belästigungen, überhaupt ein jegliches Verhalten, das gegen die Persönlichkeitsrechte einer Teilnehmerin oder eines Teilnehmers verstößt.

Organisationskomitee des 62. Kulturseminars
Eberhard Scheiffele Marcus Conrad Thomas Schwarz Kotaro Isozaki
Satoshi Kuwahara (Vorsitzender) Risa Shimozono Daichi Moriguchi
Mariko Wakayama Manuela Sato-Prinz (DAAD)

Themenbeschreibung: Phantastische Literatur

Die Diskussion über die Phantastik hat bislang zu keiner genauen Klärung dieses Begriffs geführt. Die Forschung nimmt vier Konjunkturen des Phantastischen an. Die erste wurde im 18. Jahrhundert durch die Wiederentdeckung des Wunderbaren ausgelöst und manifestierte sich auch im Schauerroman. Es folgten Hochphasen in der Romantik und in der Literatur der Jahrhundertwende. Eine Wiederbelebung des Phantastischen, das denkbar und erkennbar Unmögliches erzählt, setzte in den 1970er Jahren ein.
Konstitutiv für das Phantastische scheinen jedenfalls die folgenden Aspekte zu sein.

1. Der Aspekt *Störung*

Texte werden als phantastisch charakterisiert, wenn sie von einer Störung erzählen, die fundamentale Krisen produziert. Der widersinnige oder übernatürliche Stellenwert der Störung und die Hilflosigkeit der Betroffenen führen dazu, dass sie diese Störung nicht als eine Facette von Normalität begreifen können. Der Protagonist sieht sich einer Art „Riss in der Welt“ (Roger Caillois) gegenüber.

2. Der Aspekt *Ordnungskonflikt*

Im Zentrum von phantastischen Narrationen steht der Konflikt zwischen einer rationalen, raumzeitlich organisierten, weitgehend anerkannten Ordnung und einer anderen kontingenten Welt, deren Ursprung, Einrichtung und Verfasstheit. Die Störung greift so stark in den Gang der Dinge und das Leben der Menschen ein, dass eine Lösung des Konflikts mit herkömmlichen Mitteln nicht mehr möglich ist. Phantastik bedeutet

demzufolge eine grundsätzliche Irritation oder gar eine Erosion des *common sense.* Dieser Konflikt führt dazu, dass die vertraute Welt hinterfragt, die Möglichkeiten von Erkenntnis bezweifelt und moralische Traditionen relativiert werden.

3. Der Aspekt *Literarische Inszenierung der Phantastik zwischen Tradition und Innovation*

Um dem Einbruch des Phantastischen Plausibilität zu verleihen, wird die Welt, in der das Phantastische sich ereignet, häufig auf eher traditionelle Weise dargestellt. Das phantastische Ereignis entfaltet dann seine irritierende Kraft vor dem Hintergrund einer realistisch geschilderten, wiedererkennbaren Welt. Andererseits zeichnen sich v.a. Texte der klassischen Moderne gerade dadurch aus, dass sie mit ihrer avantgardistischen Schreibweise von den Normen erzählerischer Kohärenz erheblich abweichen.

4. Der Aspekt *Phantastik und Moderne*

Die Erfahrung einer skandalösen Abweichung beeinträchtigt nachhaltig epistemische Gewissheiten oder Konventionen des Denkens. Sie stellt die Gewissheit einer vermeintlich selbstverständlichen Identität des Menschen in Frage. Es hat den Anschein, als ob die zunehmend komplexer werdende moderne Welt auch eine erhöhte Anfälligkeit für die Suggestionen des Phantastischen provoziert. Zumal der rasante Fortschritt in Disziplinen wie der Medizin (Transplantationschirurgie / Regenerative Medizin), der Biotechnologie (Genforschung / Genmanipulation) oder der Erforschung der Artificial Intelligence produziert Situationen der Überforderung, die von der phantastischen Literatur gerne produktiv besetzt werden. Das hat zu der Kritik geführt, die Phantastik favorisiere ein vormodernes Denken, das seine Attraktivität aus der Zuverlässigkeit archaischer, vorrationaler und religiöser Denkmodelle bezieht. Sie biete sich als Zuflucht vor den Auflösungserscheinungen und Konflikten unserer Zeit an.

5. Der Aspekt *Phantastik und Macht*

Die Berufung auf konservative Instanzen wie Gemeinschaft und Religion gehört nicht zwingend ins Repertoire phantastischer Erzählstrategien, da es bei dem phantastischen Ordnungskonflikt auch um eine Kritik an der Definitionsmacht einer normativen Rationalität geht. Gegen deren Diskurshoheit wird eine Macht anderer Art, ein anderes Denken und Wissen ins Spiel gebracht. Das Phantastische kann auch tendenziell subversiv wirken, insofern die binär codierten Leitbegriffe der Rationalität wie das Vernünftige und das Unvernünftige, das Lebendige und das Tote, das Reale und das Irreale, das Sichtbare

und das Unsichtbare systematisch hinterfragt oder unterlaufen werden. Das Phantastische bezweifelt die Verbindlichkeit etablierter Denkmodelle und plädiert für einen innovativen, unkonventionellen und nonkonformistischen Zugang zu kognitiven oder moralischen Problemen. Schließlich fördert die Kritik an bestehenden Gesellschaftsnormen die Utopiebildung, die auch für die phantastische Literatur eine bedeutende Rolle spielt.

***

Dieser Abriss dürfte den enormen literarischen und ästhetischen Reichtum des Begriffs Phantastik veranschaulichen, der im Zentrum des 62. Kulturseminars stehen soll. Die Unschärfe des Begriffs muss kein Defizit sein, sie kann sogar als Chance einer Anwendung auf ganz unterschiedliche literarische Texte dienen. Die besondere Leistung des Konzepts ergibt sich daraus, dass es Bilder und Narrationen für einen Zustand der Gefahr, der Bedrohung oder der Überforderung liefert, der mit traditionellen erzählerischen Mitteln kaum darzustellen ist. Fragen danach, ob ein Text zur Phantastik gehört oder nicht, paralysieren die Phantastik-Diskussion eher. Interessant hingegen sind die Veränderungen im Deutungshorizont eines Textes, sobald er phantastisch perspektiviert wird. In diesem Zusammenhang können auch Texte, die man zumeist in einem anderen kulturellen Kontext platziert, unversehens eine beachtliche phantastische Qualität erhalten.

Wir meinen, dass sich die Beschäftigung mit diesem auch im deutschsprachigen Kulturraum sehr beliebten Bereich der phantastischen Literatur ebenso für junge japanische Germanisten und ihre weitere wissenschaftliche Entwicklung als bereichernd herausstellen wird.

Bei der Auswahl der Texte stand deren spezifische Eignung für phantastische Ereignisse im Vordergrund, während zugleich darauf zu achten war, dass die Texte literaturhistorisch und stilistisch auch repräsentativ sind

Ausgewählt wurden zunächst auch Texte, die in Theoreme der Phantastik einführen. Sie sollen den Teilnehmern eine Vorstellung der Vielfalt phantastischer Literatur vermitteln. Im Zentrum der Kooperation in Arbeitsgruppen stehen in erster Linie literarische Texte, die analysiert und diskutiert werden sollen. Thematisch orientiert sich die Zusammenstellung an den folgenden vier Schwerpunkten.

a) Raum: In dieser Sektion geht es um heterotope Zimmer, Häuser, Schlösser, Städte, Landschaften wie Sümpfe und Inseln, aber auch Schiffe.

b) Zeit, vor allem unter dem Gesichtspunkt ihrer Störungen: der Achronie, der ‚alternate history', des zeitlichen Ablaufs sowohl rückwärts als auch nach vorn.

c) Figuren: Im Mittelpunkt stehen hybride Figuren, Individuen oder Gruppen, die eine genuine Eignung zu phantastischen Narrationen besitzen, wenn sie in Heterotopien versetzt werden. Einbezogen werden soll auch die im Zuge der Post- und Transhumanität vielfach ventilierte Frage nach dem Status von Menschen und Natur.

d) Utopien: Der aktuelle Boom dystopischer Darstellungen in allen Medien ließe sich unter anderem auf eine Stimmung der Angst vor unabsehbaren und unberechenbaren globalen Entwicklungen zurückführen. In dieser Sektion ist etwa zu analysieren, wie diese Stimmung der Angst in der Literatur zum Ausdruck kommt. Zu Diskussion gestellt werden soll die Frage, welche Prozesse in der Gestaltung von Dystopien wirksam sind, um auf die Möglichkeit einer in ihnen angelegten Utopie zu verweisen. In diesem Zusammenhang könnte Theodor W. Adornos Aussage, dass das „Bedürfnis, Leiden beredt werden zu lassen", „Bedingung aller Wahrheit" sei, für uns aufschlussreich sein.

****

Herr **Prof. Dr. Hans Richard Brittnacher** (geb. 1951) ist apl. Professor Emeritus für Neuere deutsche Literatur an der Freien Universität Berlin mit den Forschungsschwerpunkten: Phantastische Literatur und Intermedialität des Phantastischen; Literaturgeschichte der Goethezeit und des Fin de siècle; Außenseiter und Minderheiten in der Literatur, Zigeuner; Populärkultur.

Ab 1972 Studium der Germanistik in Marburg und Berlin, Tätigkeit als wissenschaftlicher Mitarbeiter am Fachbereich Germanistik der Freien Universität Berlin (1983–1985), Lektor an der Universität Bari (1987–1989), 1994 Promotion, 2001 Habilitation, seit 2002 Oberassistent am Institut für deutsche und niederländische Philologie, 2006 Ernennung zum außerplanmäßigen Professor, 2018 Eintritt in Ruhestand

Publikationen (in Auswahl)

Monographien

Leben auf der Grenze. Klischee und Faszination des Zigeunerbildes in Literatur und Künsten, Göttigen 2012; *Erschöpfung und Gewalt. Opferphantasien in der Literatur des Fin de siècle,* Köln 2000 [Habilitation]; *Vom Zauber des Schreckens. Studien zur Phantastik und zum Horror,* Wetzlar 1999.

Aufsätze

Totengespräche: Spiritismus im 19. und 20. Jahrhundert. In. Literatur und Religion. Konvergenzen und Divergenzen, hg. Richard Faber, Almut Barbara Renger. Würzburg 2017, S. 277-298; *Judas, der Archetyp des Verräters.* In: Sprachen des Unsagbaren. Zum Verhältnis von Theologie und Gegenwartsliteratur, hg. Dörte Klinke, Florian Priesemuth und Rosa Schinagl. Wiesbaden 2017, S. 181-198; *Unter die Zigeuner gefallen. Über ein Motiv der Abenteuerliteratur.* In: Aventiure und Eskapade. Narrative des Abenteuerlichen vom Mittelalter zur Moderne, hg. Jutta Eming, Ralf Schlechtweg Jahn. Göttingen 2017, S. 119-136.

Herausgeberschaft

Phantastik. Ein interdisziplinäres Handbuch, hrsg. von Hans Richard Brittnacher und Markus May, Stuttgart 2013; *Vom Erhabenen und vom Komischen. Über eine prekäre Konstellation*, hg. von Hans Richard Brittnacher und Thomas Koebner, Würzburg 2010.

第 26 回ドイツ語教授法ゼミナール開催のご案内

第 26 回ドイツ語教授法ゼミナールを下記の通り開催いたします。多くの皆様の参加を心よりお待ちしております。

総合テーマ：Prüfen, Testen, Evaluieren – Ansätze für Praxis und Forschung
日　　程：2022 年 3 月 19 日（土）～3 月 22 日（火）
招 待 講 師：　　Prof. Dr. Karin Kleppin (講師プロフィール)
Germanistisches Institut der Fakultät für Philologie, Universität Bochum
会　　場：多摩永山情報教育センター（Google Maps）
https://www.tamanagayama.com/
参　加　費：38,000 円（日本独文学会会員の学生・院生，非常勤講師の方には参加費補助を検討しています）
定　　員：40 名
参加申込締切：2021 年 12 月 15 日
参 加 申 込：https://www.daf-seminar.jp よりお申し込みください。

ゼミナール内容：

テストおよび試験は外国語教育において欠かすことができないものです。学習の進度や定着度合いの確認，そして学校教育全般においては主に成績評価の土台となっています。そのため，教師の重要な役割の一つには，適切な試験の課題を作成することが挙げられます。しかしながら，それぞれの言語能力をどの程度正確に測ることができるのでしょうか。また特定の学習者層にとって意義のあるテスト形式とはどのようなものでしょうか。あるいは，どのように試験そのものを評価することができるのでしょうか。第 26 回ドイツ語教授法ゼミナールでは，このような疑問点について考えていきます。

ゼミナールの前半では，まず試験・テスト・評価の領域にかかわる基礎的な知識の獲得が中心となります。特に，可能な限り自然な，且つ対象となる学習者にとって重要な文脈における言語的活動を測るための試験を設定する可能性について探ります。それに続き後半では，さまざまな部分的能力（読む，聞く，書く，

話す，あるいは翻訳や通訳などの言語仲介）を測るための「良い」独自の試験課題を作る際に必要な段階についても扱います。例えば，テストの全体構成の設計，問題形式や設問文の設定，そして産出型の課題における評価基準の設定，学習者に適したフィードバックの考案についてです。

また，実際に授業に関連したテスト課題を作成し，それについての意見交換を行います。ゼミナール全体として，将来参加者自身が試験やテストを作成する際の示唆を得ることを目指すだけはなく，独自の研究プロジェクトへの発展へとつながるような議論も行います。

招待講師について：

Karin Kleppin 氏（Bochum 大学教授）は，外国語教育におけるテスト考案の分野においての第一人者であり，世界中で試験作成に関する研修やセミナーを通して教師をサポートされています。TestDaF の考案にも参与され，また長年，ベルリン・フンボルト大学の教育品質改善研究所（Institut zur Qualitätsentwicklung im Bildungswesen）と共同でテスト問題の開発にもご尽力されています。

ドイツ語教授法ゼミナールでは，日本で教鞭をとるドイツ語教員間で，お互いの授業や試験の実践的経験について議論を深めることも目的としています。ゼミナールの参加において，予備知識は必要としません。ドイツ語教育以外のさまざまな学問分野を背景にご活躍されている方や，過去に教授法ゼミナールに参加したことのない方もぜひお申込みください。

ゼミナール中に，テーマに関連する研究発表（ドイツ語で 15 分程度）を希望される方は，参加申し込みの際に「研究発表希望」と記し，発表題目と発表要旨（250 語程度）を添付してください。なお，発表者の最終決定は実行委員会にご一任ください。

第 26 回ドイツ語教授法ゼミナール実行委員会

Olga Czyzak（実行委員長）,Cezar Constantinescu，Frank Nickel，村元麻衣，坂本真一，武井佑介，Nancy Yanagita，Manuela Sato-Prinz（DAAD)

お問い合わせ先：daf2022-open_AT_jgg.jp（_AT_ は@）

※ 参加は申し込み順に受け付けますが，最終的な選考は日本独文学会理事会で決定いたします。

※ 中国・韓国・台湾のゲルマにスト関連団体の方が申し込む際は，略歴および主要業績表を提出してください。参加費は 38,000 円です。

※ 日本独文学会会員以外の方が申し込む際は日本独文学会会員（学生・院生の申し込みの場合は指導教員）の紹介が必要です。紹介者の氏名をお知らせください。また他に，略歴，参加希望理由（ドイツ語で 150 語程度），業績表（研究業績がある方）を申込時に提出してください。参加費は 48,000 円です。

Ankündigung des 26. DaF-Seminars der JGG

Rahmenthema: Prüfen, Testen, Evaluieren – Ansätze für Praxis und Forschung

Termin: Samstag, 19. bis Dienstag, 22. März 2022

Gastdozentin: Prof. Dr. Karin Kleppin (Profilseite)
Germanistisches Institut der Fakultät für Philologie, Universität Bochum

Ort: Tama-Nagayama Information & Education Center, Tokyo (Google Maps)
https://www.tamanagayama.com/

Teilnahmegebühr: ¥38.000 (Exklusive Mittagessen. Eine Ermäßigung für Lehrbeauftragte und Studierende, die Mitglieder der JGG sind, ist geplant.)

Teilnehmerzahl: maximal 40

Anmeldeschluss: 15. Dezember 2021

Anmeldung: https://www.daf-seminar.jp

Themenbeschreibung:

Tests und Prüfungen sind fester Bestandteil des Fremdsprachenunterrichts. Sie dienen zur Überprüfung des Lernfortschritts, zur Feststellung des Sprachstandes und sie bilden im schulischen und universitären Kontext meist die Grundlage für die Benotung. Eine wichtige Aufgabe von Lehrenden besteht also darin, geeignete Prüfungsaufgaben zu entwickeln. Doch wie genau können die einzelnen Kompetenzen gemessen werden? Welche Testformen sind für bestimmte Gruppen sinnvoll? Wie können die Prüfungen ausgewertet werden? Diesen und ähnlichen Fragen soll im Laufe des 26. DaF-Seminars nachgegangen werden.

Im ersten Teil steht grundlegendes Wissen über den Bereich Prüfen, Testen, Evaluieren im Mittelpunkt. Es geht insbesondere um Möglichkeiten, Prüfungen so zu gestalten, dass in einem möglichst authentischen und für die Zielgruppe relevanten Kontext sprachlich gehandelt werden muss. Im Weiteren geht es um die notwendigen Schritte bei der Erstellung von „guten“ eigenen Prüfungsaufgaben für unterschiedliche Teilkompetenzen (Leseverstehen, Hörverstehen, Schreiben, Sprechen, eventuell auch Sprachmittlung). Zu diesen Schritten gehören vor allem die Beschreibung des Testkonstrukts, die Festlegung des Aufgabenformats, das Formulieren der Arbeitsanweisung und bei produktiven Aufgaben die Festlegung der Bewertungskriterien sowie Überlegungen zu einem lernergerechten Feedback. In Kleingruppen werden unterrichtsbezogene Prüfungsaufgaben selbst erstellt und besprochen. Neben Anregungen für die selbständige Entwicklung von Prüfungen und Tests sollen auch Impulse für eigene Forschungsprojekte gegeben und diskutiert werden.

Die Gastdozentin:

Prof. Dr. Karin Kleppin ist eine profilierte Vertreterin aus dem Bereich der Testkonzeption im Kontext des Fremdsprachenunterrichts. Sie leitet weltweit zahlreiche Fortbildungen und Seminare und unterstützt Lehrende bei der Entwicklung von Prüfungen. Sie war außerdem

an der Konzeption des TestDaF beteiligt und kooperiert seit vielen Jahren mit dem Institut zur Qualitätsentwicklung im Bildungswesen an der Humboldt-Universität Berlin bei der Entwicklung von Testaufgaben.

Ziel des DaF-Seminars ist es auch, den Austausch unter in Japan tätigen DaF-Lehrkräften über ihre Erfahrungen und die eigene Unterrichts- und Prüfungspraxis anzuregen. Spezielle Vorkenntnisse sind für die Teilnahme an diesem Seminar nicht erforderlich. Wir freuen uns über Bewerbungen aus allen Studien- und Forschungsrichtungen. Wir würden uns besonders über die Teilnahme von Kolleginnen und Kollegen freuen, die bisher noch nicht auf dem DaF-Seminar waren.

Wenn Sie ein Referat mit inhaltlichem Bezug zum Seminarthema halten möchten (Sprechzeit ca. 15 Minuten), bitten wir Sie, uns bei der Anmeldung gleich den Titel und ein Resümee (ca. 250 Wörter) mitzuschicken. Die endgültige Auswahl der Referate bleibt dem Organisations-komitee vorbehalten.

Juli 2021

Das Organisationskomitee des 26. DaF-Seminars:
Olga Czyzak (Vorsitzende), Cezar Constantinescu, Frank Nickel, Mai Muramoto, Shinichi Sakamoto, Yusuke Takei, Nancy Yanagita und Manuela Sato-Prinz (DAAD)
Kontakt: daf2022-open_AT_jgg.jp (_AT_ steht für @)

※ Die Anmeldungen werden in der Reihenfolge ihres Eintreffens registriert. Die letzte Entscheidung über eine Teilnahme liegt beim Vorstand der JGG.
※ Bewerbungen von Mitgliedern eines germanistischen Verbandes in China, Korea und Taiwan sind herzlich willkommen! Schicken Sie uns bitte zusätzlich zur Online-Anmeldung eine Beschreibung des akademischen Werdegangs und eine Liste wichtiger Publikationen. Die Teilnahmegebühr beträgt (wie bei JGG-Mitgliedern) ¥38.000.
※ Für eine Bewerbung eines Nicht-Mitglieds der JGG ist die Empfehlung eines JGG-Mitgliedes (bei Studierenden: ihrer betreuenden Lehrperson) erforderlich. Zusätzlich sind eine Beschreibung des akademischen Werdegangs, ein Motivationsschreiben (ca. 150

Wörter) und eine Liste wichtiger Publikationen (wenn vorhanden) beizulegen. Die Teilnahmegebühr beträgt ¥48.000.

2021 年度ドイツ語論文執筆ワークショップ開催のご案内

ドイツ語論文執筆ワークショップを下記の通り開催いたします。参加をご希望の方は，次頁の「2021 年参加申し込み必要事項」をご参照いただき，10 月 15 日までにお申し込みください。

日　　時：　2021 年 11 月 6 日（土）13:30〜18:00,
〜11 月 7 日（日）10:00 〜16:00（昼休み：12:00〜13:00）

場　　所：　立教大学池袋キャンパス
6 日：14 号館，D603
7 日：1 号館（本館），1101
※ ワークショップは，全面オンラインで開催する場合がございます。<u>対面で開催する場合でもオンライン配信</u>をいたします。開催方法については後日ご連絡いたします。

講　　師：　井出万秀（立教大学）　クラウス，マヌエル（早稲田大学）

講　　演：　宮崎麻子（大阪大学）

対　　象：　ドイツ語論文の執筆を予定されている方（特に，大学・大学院に在籍されている方）

参加費用：　独文学会員は**無料**，非会員は **3000 円**
※ 首都圏外から参加する方のうち，①学生・大学院生の方，②博士課程修了あるいは退学後 5 年以内で常勤職を持たない方には，DAAD から宿泊費 10000 円の補助があります。（全面オンラインで開催する場合，補助はございません。）

定　　員：　40 名

申込締切：　2021 年 10 月 15 日

申込方法：　次頁の「2021 年参加申し込み必要事項」を記入の上，下記のメールアドレス宛にお送りください。

ws_anmeldung[at-mark]jgg.jp

（申し込み後 2 日以内に返信がない場合は，実行委員会にメールが届いていない可能性があります。お手数ですが，下記問い合わせ用メールアドレス宛に改めてご連絡ください。）

ワークショップでは，ドイツ語論文・著書の執筆経験者による講演を挿みなが

ら，参加者が提出したドイツ語のレジュメ・論文の内容を具体的に検討していきます。レジュメ・論文の提出をご希望の方は，申し込み事項とともに，**10 月 15 日まで**に上記のメールアドレスへお送りください。また，提出していただく原稿は，レジュメ・論文のいずれも，**独文学会の執筆要領に従い，A4 で 3 頁以内**でお願いいたします。

ご質問は，下記のメールアドレスで承ります。皆様のご参加をお待ちしております。

2021 年度ドイツ語論文執筆ワークショップ実行委員会
池中愛海，若山真理子，馬場大介
問い合わせ:ws_info[at-mark]jgg.jp

ドイツ語論文執筆ワークショップ
2021 年度参加申し込み必要事項

以下の事項を記入の上，ws_anmeldung[at-mark]jgg.jp 宛にお送りください。

1. **氏名**
2. **所属**
3. **職業**：学生（大学院生）・非常勤教員・常勤教員・その他（　　）
4. **日本独文学会**：会員・非会員
5. **専門分野**
6. **住所**
7. **メールアドレス**
8. **論文・レジュメの提出**：有・無
9. **質問**

※「職業」,「日本独文学会」,「論文・レジュメの提出」については，いずれかの項目をお選びください。
※「職業」,「日本独文学会」の項目は参加費の計上に,「住所」は宿泊費補助の計上にあたり必要になります。住所の記入を希望されない方は，その旨をお書きください。
※「質問」があれば，記入をお願いいたします。

DAAD 奨学金についてのご案内

ドイツ学術交流会（DAAD）は現在，下記の奨学金プログラムへの応募者を募集しています。応募締め切りや提出書類はプログラムによって異なりますので，詳細は DAAD のホームページから募集要項をご確認ください。

https://www.daad.jp/scholarships

① 研究奨学金（長期）

対象：修士号を取得した又は取得見込みの方

給付期間：7～48 ヶ月（2022 年 10 月～給付開始）

審査方法：1 次 (書類)，2 次 (面接：オンライン)

応募締切：2021 年 10 月 20 日

② 研究奨学金（短期）

対象：修士号，博士号を取得した又は取得見込みの方，および若手研究者

給付期間；1～6 ヶ月

審査方法：書類審査のみ

応募締切：2021 年 11 月 16 日（2022 年 4 月～給付開始）

2022 年 4 月 8 日（2022 年 10 月～給付開始）

③ 留学奨学金

対象：全ての学部卒業生又は卒業見込みの方（芸術分野を除く）

給付期間：10～24 ヶ月（2022 年 10 月～給付開始）

審査方法：１次（書類），２次 (面接：オンライン)

応募締切：2021 年 10 月 20 日

④ 芸術留学奨学金

対象：芸術分野（音楽・美術・建築など)の学部卒業生又は卒業見込みの方

給付期間：10～24 ヶ月（2022 年 10 月～給付開始）

審査方法：書類・作品審査

応募締切：(建築) 2021 年 9 月 30 日

(音楽) 2021 年 10 月 1 日

(舞台芸術) 2021 年 10 月 30 日

(造形芸術・デザイン・映画) 2021 年 11 月 30 日

⑤ 大学教員・研究者のための研究滞在奨学金

対象：日本国内の大学・研究機関において職務についている博士号取得者

給付期間： 1～3 ヶ月

審査方法： 書類審査のみ

応募締切： 2021 年 10 月 5 日（2022 年 3 月～7 月の間に給付開始）
2022 年 4 月 8 日（2022 年 8 月以降給付開始。滞在は最長 2023 年 1 月まで）

⑥ 元 DAAD 奨学生の再招待

対象：過去に 6 ヶ月以上 DAAD より助成を受けた者

給付期間： 1～3 ヶ月

審査方法： 書類審査のみ

応募締切： 2021 年 10 月 5 日（2022 年 3 月～7 月の間に給付開始）
2022 年 4 月 8 日（2022 年 8 月以降給付開始。滞在は最長 2023 年 1 月まで）

⑦ 春期（HFK）・夏期（HSK）ドイツ語研修奨学金

対象：学部生（奨学金給付開始までに学部 2 年生を修了していること），修士・博士課程在籍者

給付期間： 約 4 週間

審査方法： 書類審査のみ

応募締切： （HFK）2021 年 11 月初旬予定（給付時期：2022 年春頃）
（HSK）2021 年 12 月初旬予定（給付時期：2022 年夏頃）

新型コロナウイルスの影響により，今後募集内容に変更がある可能性もありますので，最新情報は常に DAAD 東京事務所のホームページ（www.daad.jp）をご確認ください。

何かご不明な点がございましたら，kurushima@daadjp.com までお問い合わせくださいませ。

以上，何卒宜しくお願いいたします。

DAAD-Stipendienprogramme

Derzeit sind folgende Stipendien ausgeschrieben. Bitte entnehmen Sie weitere Informationen zum jeweiligen Programm der Webseite des DAAD Tokyo: https://www.daad.jp/scholarships

1. Forschungsstipendien (lang)

Zielgruppe: Doktorand*innen

Dauer der Förderung: 7-48 Monate

Auswahlverfahren: Papierauswahl & Interview (online)

Bewerbungsfrist: 20.10.2021

2. Forschungsstipendien (kurz)

Zielgruppe: Doktorand*innen und Postdocs

Dauer der Förderung: 1-6 Monate

Auswahlverfahren: Papierauswahl

Bewerbungsfrisen: 16.11.2021 oder 08.04.2022

3. Studienstipendien – Masterstudium für alle wissenschaftlichen Fächer

Zielgruppe: Graduierte

Dauer der Förderung: 10-24 Monate

Auswahlverfahren: Papierauswahl & Interview (online)

Bewerbungsfrist: 20.10.2021

4. Studienstipendien – Masterstudium für künstlerische Fächer

Zielgruppe: Graduierte eines künstlerischen Fachbereiches

Dauer der Förderung: 10-24 Monate

Auswahlverfahren: Papierauswahl & Einreichen einer Arbeitsprobe

Bewerbungsfristen: Architektur: 30.09.2021
Musik: 01.10.2021
Darstellende Kunst: 30.10.2021
Bildende Kunst, Design und Film: 30.11.2021

5. Forschungsaufenthalte für Hochschullehrer und Wissenschaftler

Zielgruppe: Hochschullehrer*innen und Wissenschaftler*innen, die an einer japanischen Hochschule tätig sind

Dauer der Förderung: 1-3 Monate

Auswahlverfahren: Papierauswahl

Bewerbungsfristen: 05.10.2021 oder 08.04.2022

6. Wiedereinladung ehemaliger DAAD-Stipendiaten

Zielgruppe: ehemalige DAAD-Stipendiat*innen, die mehr als sechs Monate individuell gefördert wurden

Dauer der Förderung: 1-3 Monate

Auswahlverfahren: Papierauswahl

Bewerbungsfristen: 05.10.2021 oder 08.04.2022

7. Hochschulfrühlings- und Hochschulsommerkurse (HFK/HSK)

Zielgruppe: Bachelorstudierende, die bis zum Förderbeginn mind. zwei Hochschuljahre abgeschlossen haben, Graduierte und Doktorand*innen

Dauer der Förderung: ca. 4 Wochen

Auswahlverfahren: Papierauswahl

Bewerbungsfrist: Anfang November (HFK)
Anfang Dezember (HSK)

Bitte beachten Sie, dass aufgrund der unvorhersehbaren weiteren Entwicklung der COVID-19-Pandemie kurzfristig Änderungen bezüglich der oben genannten Angaben vorgenommen werden können. Aktuelle Informationen finden Sie auf der Website der DAAD-Außenstelle Tokyo (www.daad.jp). Bei weiteren Fragen steht Ihnen Herr Kurushima (kurushima@daadjp.com) gern als Ansprechpartner zur Verfügung.

ゲーテ・インスティトゥートからのお知らせ

イベント開催のお知らせ
2021 年 10 月 9 日（土）

DAAD-Fachtag「オフライン・オンラインの E-Learning」

多くの教育機関がオンライン授業を余儀なくされ，私たちの日常の授業や仕事も大きな影響を受けています。教える側，教わる側が新に獲得した様々な知識や技術，アプリケーション，スキルなどはこれからも受け継がれていきます。

私たちがオンライン，オフラインで得たこれらの新たな知見をどのように生かせば，外国語教育をさらに発展させ，作業を効率化し，授業内容を充実させることができるでしょうか。この度の **DAAD-Fachtag** では，この問題をとりあげ，Oliver Bayerlein（南山大学），Carsten Waychert（京都産業大学）両氏とともに，下記のプログラムを企画いたしました。

開催日時
2021 年 10 月 9 日（土）11 時から 18 時まで
（詳細は下記リンク先をご覧ください。
https://www.daad.jp/files/2021/06/2021_DAAD_Fachtag_Elearning.pdf）

お申込は，9 月初旬からオンラインにて受け付けます。詳細はメールでお知らせします。

Veranstaltungsankündigung: DAAD-Fachtag „E-Learning offline und online“ am 09.10.2021

Die erzwungene Online-Phase an vielen Bildungseinrichtungen hat tiefgreifende Auswirkungen auf unseren Unterrichts- und Arbeitsalltag. Viele Erkenntnisse, viele Techniken und Apps, viele Fertigkeiten der Lehrenden und Lernenden werden auch weiterhin erhalten bleiben. Wie können wir die Fähigkeiten, die wir zusätzlich erworben haben, die Erfahrungen, die wir gesammelt haben, auch nach der Pandemie sowohl offline als auch online so benutzen, dass sie unseren Fremdsprachenunterricht erweitern, die Arbeitsbelastung verringern und die Unterrichtsinhalte relevant(er) machen? Diese Frage steht im Zentrum des DAAD-Fachtags, den die Außenstelle gemeinsam mit Oliver Bayerlein (Nanzan-Universität) und Carsten Waychert (Kyoto-Sangyo-Universität) wie

folgt plant:

Samstag, 9. Oktober 2021
Vielfältiges Programm zwischen 11.00–18.00 Uhr
(Genaueres siehe hier:
https://www.daad.jp/files/2021/06/2021_DAAD_Fachtag_Elearning.pdf)
Online Anmeldung: ab Anfang September (Details folgen über die Mailingliste)

ネィティブ ドイツ語担当教員の方にぜひお知らせ願います！

皆様の職場にドイツ語を母語とするドイツ語教員の方はいらっしゃいませんか。もしいらっしゃったら，その方に以下の情報をお知らせいただけませんでしょうか。

お知らせいただきたいのは，「DAAD のドイツ語担当招聘教員プログラム」です。多くのドイツ人ドイツ語教員にはよく知られたプログラムです。対象は，ドイツ以外の国の大学で主としてドイツ語・ドイツ文学等，ドイツに関係する学科を受け持つドイツ語が母語のすべての教員です（ドイツ人に加え，ドイツ語が公用語のオーストリア，スイス，ベルギー，リヒテンシュタイン，ルクセンブルグ国籍の教員も含まれます)。同プログラムの助成対象になると，様々なキャリアアップ研修の機会が提供されるだけでなく，現所属大学における様々なプロジェクトに対する助成を受けることができ，本や専門誌などを無料で送付してもらうこともできるため，所属部署にもメリットがあります。

DAAD はドイツ語教員の着任情報をすべて把握しているわけではありませんので，ネィティブドイツ語教員着任時に，このプログラムの存在をお伝えいただきたくお願い申し上げる次第です。このプログラムの詳細は下記リンク先にてご確認いただけます。
https://www.daad.de/de/im-ausland-studieren-forschen-lehren/lehren-im-ausland/ortslektorenprogramm/

ご不明な点がございましたら，Manuela Sato-Prinz (DAAD 特任講師，lekt(at)daadjp.com)までお気軽にお問合せください。

Ortslektor*innen gesucht!

Viele der deutschen Kolleg*innen kennen es schon: Das Ortslektorenprogramm. Das vom DAAD finanzierte Programm richtet sich an deutschsprachige Hochschuldozent*innen (d.h. mit der Staatsbürgerschaft eines Land mit Amtssprache Deutsch – also Deutschland, Österreich, die Schweiz, Belgien, Liechtenstein und Luxemburg), die im Ausland tätig sind und in der Regel im Bereich Deutsch/Germanistik/sonstiger Fächer mit Deutschlandbezug unterrichten. Indirekt profitieren jedoch auch die Abteilungen der deutschen Kolleg*innen von einer Mitgliedschaft, denn der DAAD bietet Teilnehmenden des Programms nicht nur unterschiedliche Möglichkeiten der fachlichen Fortbildung an, sondern auch eine finanzielle Förderung von Projekten an den Hochschulen sowie kostenlose Bücherpakete oder Fachzeitschriften, die im Kollegium geteilt werden können.

Da wir es nicht immer erfahren, wenn Stellen neu besetzt werden, würden wir uns sehr freuen, wenn Sie Ihre deutschsprachigen Kolleg*innen auf das Angebot hinweisen würden. Weitere Informationen über das Programm finden Sie hier: https://www.daad.de/de/im-ausland-studieren-forschen-lehren/lehren-im-ausland/ortslektorenprogramm/

Für Rückfragen steht Ihnen die DAAD-Lektorin z.b.V. an der Außenstelle Tokyo, Manuela Sato-Prinz (lekt(at)daadjp.com), gern zur Verfügung.

会費納入について

会員の皆様におかれましては，すみやかな会費納入にご協力いただきありがとうございます。

事務局では会員お一人お一人の会費ご納入に関して，年間を通じ必要に応じてご連絡を差し上げています。その際はご理解，ご協力賜りますようお願い申し上げます。

また，以下の点をご確認ください。

【会費割引制度】

前年度末までに 80 歳になられた方，常勤職をお持ちでない方，学生の方は，ご本人からのお申し出によって，年会費の割引を受けられます。会費規程をご確認の上，事務局までお申し出ください。

【口座自動振替によるご納入】

口座自動振替のお申込みは随時受け付けています。まだお申込みでない方は是非ご検討ください。申込書をお持ちでない方は事務局までご連絡ください。お申込みくださった時点でその年度の手続き締切りに間に合わなかった場合は，自動的に次年度開始の扱いとなります。その年の年会費は振込にてご納入くださるようお願い致します。

振替日は年に一度のみ，毎年 7 月 1 日（1 日が土日の場合は 2 日または 3 日）です。すでにご登録の方は事前に口座残高をお確かめいただけますと幸いです。7 月 1 日に振替ができなかった場合は，改めて郵便振込をお願いしています。

振替口座等の変更や年会費割引をご希望の場合は，4 月末までに事務局にご連絡ください。

【郵便振込によるご納入】

口座自動振替をお申込みいただいてない方には，5 月から夏にかけて学会年会費納入のお願いと払込取扱票をお送りする予定です。

以上，よろしくお願い申し上げます。ご不明の点，ご質問は事務局（TEL./FAX : 03-5950-1147，Mail フォーム : http://www.jgg.jp/mailform/buero/）までお問い合わせください。

日本独文学会事務局

一般社団法人日本独文学会会費規程

（目的）

第１条　この規程は，定款第７条の規定に基づき，入会金及び会費の納入に関し，必要な細則を定めるものとする。

（入会金）

第２条　会員は入会金として1,000 円を納入しなければならない。

（入会金の納期）

第３条　入会金は，この法人から入会承認の通知を受けた日から30日以内に納入しなければならない。

（会費）

第４条　会員は，次の会費（年額）を納入しなければならない。

正会員　　10,000 円

賛助会員　　30,000 円（学術交流団体など非営利団体の場合10,000円）

（会費の納期）

第５条　会員は，当該事業年度開始の7月末日までに，会費年額の全額を納付しなければならない。

（会費の減免）

第６条　4月1日現在で常勤職を持たない正会員の当該年度会費は，本人の申告に基づいて8,000円とする。

２　4月1日現在で大学・大学院およびこれに準ずる教育・研究機関に在学する正会員の当該年度会費は，本人の申告に基づいて5,000円とする。申告は，6月1日までに学生証ないしはそれに相当する証明書のコピーを郵送もしくはファックスで学会事務局に提出することによって行うものとする。

３　4月1日現在で満80歳以上の正会員の年度会費は，本人の申告に基づいて5,000円とする。申告は6月1日までに行うものとする。

４　会費の減免は申告が受理された年度から適用し，遡って適用されることはない。

５　常勤職を持たない正会員が常勤職に就いた場合は，身分が変わった直後の4月20日までに身分の変更を学会事務局に届け出るものとする。

６　大学・大学院およびこれに準ずる教育・研究機関に在学する正会員の身分に変更があった場合は，身分が変わった直後の4 月20日までに身分の変更を学会事務局に届け出るものとする。

（使用目的）

第７条　入会金及び会費は次の各号に定める事項に使用する。

（1）　本会の運営

（2）　本会の機関誌等の発行

（細則）

第８条　この規程に定めるもののほか，この規程の実施に必要な事項は，理事会の決議により別に定めることができる。

（改廃）

第９条　この規程の改廃は，総会の決議による。

第 18 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告（日本語部門）

日本独文学会･DAAD 賞日本語部門選考委員会は, 2020 年 10 月 4 日に第 1 回, 11 月 29 日に第 2 回，2021 年 1 月 23 日に第 3 回の委員会を開催した。3 回とも Zoom による Web 会議方式であった。

選考委員は，尾張充典，粂川麻里生，桑原聡，田丸理砂，古矢晋一，吉田耕太郎（敬称略）の 6 名である。

今回審査対象となったのは，研究書部門 2 点，論文部門 7 点であった。

第 1 回委員会では，委員長（桑原聡），副委員長（田丸理砂）を選出し，審査対象の分担と審査方法を協議した。審査対象の分担については，1)委員それぞれの研究領域に近い著作・論文を審査すること，2) すべての対象作は複数の委員が審査することとした。審査方法については，各委員が分担した著作・論文について次回の委員会で書面ないし口頭で審査報告を行い，その後合同で討議することを申し合わせた。

第 2 回委員会では，各委員が審査報告を行い，それに続いて合同で討議した。その結果，著作 1 点，論文 3 点を選び，次回までにそれを全員が査読し，審査報告を行うこととした。

第 3 回委員会では，各委員が審査報告を行った後，合同で討議した結果，以下の結論を得た。

1) 研究書部門では，次の 1 点を独文学会・DAAD 賞候補として推薦する。
須藤温子『エリアス・カネッティ—生涯と著作』（月曜社，2019 年）

2) 論文部門では，次の 1 点を独文学会・DAAD 賞候補として推薦する。
徳永恭子「移動の文学—ランスマイアーの『スラバヤへの道』に関して」（『ドイツ文学』158 号）

以下に推薦理由を述べる。

日本語研究書部門

須藤温子『エリアス・カネッティ—生涯と著作』（月曜社，2019 年）

セファルディ系ユダヤ人の作家･思想家であるエリアス･カネッティ（1905-1994）の生涯と著作を包括的に論じた本書は，ウィーンからロンドンに移住し，チューリヒで亡くなったこの亡命作家を時代や環境の中に丁寧に位置付けながら多角的に評価し，文化史的な観点も顧慮しつつ，その文学活動の全体像を明らかにした労作である。本書は「ウィーン・女性・ユダヤ人」，「群衆と権力」，「生・死・生き残ること」，「亡命—ウィーンを追われて」，「言語と故郷—ユダヤ人であること」の五部構成になっており，小説『眩暈』を中心的に扱った博士論文に加えて，『群

衆と権力』や自伝，断想集などについて著者が日本語およびドイツ語で発表した論文が基になっている。

本書のこのような構成は一見個別の主題が並列されているように見えるが，審査委員会では結果としてカネッティの活動の多面性が説得力を持って明快に論じられているという意見で一致した。須藤氏は，例えば主著『群衆と権力』で展開された「死」と「生き残ること」をめぐる思索が作家の生涯とどのような関係にあったのか，断想集などに即して明らかにし，カネッティにおける生と作品の有機的な連関を絶えず意識しながら論を展開している。本書はカネッティの自伝とも批判的に距離をとりつつ，全体として優れた作家論になっていると言えるだろう。

本書は伝記や先行研究を踏まえた専門的なカネッティ研究であると同時に，この作家の特徴と魅力を一般の読者にわかりやすく伝えることに成功している点も評価された。また須藤氏はカネッティの周辺にいたローベルト・ノイマンやヴェーザ・カネッティという日本ではあまり知られていない作家たちの作品も丹念に読解し，新たな光を当てている。本書はカネッティだけでなく，これらの作家を今後新しく読むための刺激ともなるだろう。

（追記 : 著者須藤温子氏は，2021 年 3 月 19 日に永逝された。今後の，さらなる，実り豊かな発展が大いに期待されていただけに，須藤氏のあまりにも早いご逝去は真に惜しまれる。謹んでご冥福をお祈りする。）

日本語論文部門

徳永恭子「移動の文学—ランスマイアーの『スラバヤへの道』に関して」（『ドイツ文学』158 号）

徳永恭子氏の論文は，『ドイツ文学』158 号の特集「移動の文学—ネーションを越える文学」の特集論文の一つとして掲載されたものである。本論文は，ランスマイアーの作品集『スラバヤへの道』（1999）における移動を空間的および時間的観点からとらえ，さらには移動をランスマイアーという作家の文学的営為のアレゴリーと指摘する，たんなる作品論に留まらない，ランスマイアー文学の本質に迫る意義深い論考といえよう。

徳永氏は，それぞれジャンルの異なる，講演，ルポルタージュ，散文から構成される作品集『スラバヤへの道』の編集に有機的な意味を見出し，ここに作者が物語という「発明された世界」へと到るための文学的移動の軌跡を読みとる。

作品集のタイトルとなっているバイエルン芸術アカデミー文学賞（1992 年）受賞記念講演「スラバヤへの道」についての分析では，インドネシアでの移動の際の著者と現地の人びととのジェスチャーを交えた意思疎通が，先行研究に従って，

ポストモダン的記号論の手法で読み解かれているだけではなく，それよりもむしろ，こうした伝達方法について，ポストコロニアリズムの文脈から解釈が試みられているところに本論文の独創性がある。

一方ルポルタージュ作品については，徳永氏は，ランスマイアーのルポルタージュは従来のそれとは異なり，報告者の現前性を条件とせず，フィクションとノンフィクションの境界の絶え間ない移動が特徴だと指摘する。『スラバヤへの道』に収められたドイツとオーストリアの地理的辺境，社会的周縁をテーマとしたルポルタージュでは，ヨーロッパ辺境の地のアクチュアルな問題が，過去に遡及して語られている。現在と過去の行き来もまた時間的「移動」であり，歴史や神話を扱った散文の本作品集への挿入は，作者による自らの創作手法の表明を示唆するものだという。

『スラバヤへの道』は，空間的および時間的移動を繰り返す中で，物語の創作へと到る作家ランスマイアーの文学営為を示すものであると，徳永氏は述べている。その意味において本論文は広くランスマイアー論（作家論）ととらえることができ，今後のランスマイアー研究の指針を示す優れた研究成果である。

（文責：桑原聡）

第 18 回日本独文学会・DAAD 賞審査報告（ドイツ語部門）

ドイツ語部門審査報告

選考委員は高橋義人（委員長），武田利勝，Thomas Pekar，細見和之（副委員長）の 4 名（50 音順），審査の対象となったのは 4 のドイツ語論文だった。選考委員会は 2020 年 10 月から 11 月にかけてオンラインで 2 回開催され，選考委員が全論文について，その長所と短所を指摘し，それを踏まえた議論を行った。候補論文は 4 点と少なかったが，いずれも力作だった。討議の結果，下記論文 2 点を学会賞候補として推薦することに決定した。

推薦理由

ドイツ語論文部門

Isamitsu MURAYAMA: Intermediale Wechselwirkung von Text und Bild zur Stilisierung einer idealen Märchenerzählerin. (Fabula. Zeitschrift für Erzählforschung, Bd. 60)

『グリム童話集』の研究にはいくつかの動向があるが，その重要なひとつに，グリム兄弟が収集したメルヘンのルーツに関する文献学的調査がある。ルーツを知るには，グリム兄弟にメルヘンを語ってくれた語り手たちのことを仔細に調べなければならない。

この面でのグリム研究の代表者はケルンの Heiz Rölleke である。著者の手法はレレケ的である。レレケ同様，著者の研究の根底には歴史を批判的に辿る精緻な実証主義がある。グリム童話集の語り手であるドロテーア・フィーマンとその肖像画を実証主義的・図像学的に調査した結果，本論文は文献学的ドイツ文学研究の手本ともいうべき秀作になっている。

グリム童話はどれほど Volksmärchen か，それとも Kunstmärchen か。これはすでにグリム兄弟の生前から Jakob と Arnim の論争の的であり，その論争は今日にいたるまで続いているが，グリム兄弟が目指したのは明らかに Volksmärchen だった。

グリム兄弟が望んだ理想的な語り手は，年配の素朴な農婦だった。ある日，グリム兄弟はドロテーア・フィーマンに出会い，彼女は自分たちの理想にかなり近い人だと思った。そこで彼女の肖像画が『グリム童話集』第二巻の口絵に用いられた。描いたのは，グリム兄弟の弟のルートヴィッヒ・グリムである。

『グリム童話集』のうち，「赤ずきん」「白雪姫」などの語り手はマリー・ハッセンプルークだった。マリーはフランスからやってきた帰化人だった。彼女ではなく，ドロテーア・フィーマンの肖像画を『グリム童話集』の口絵に用いたのは，この童話集がドイツの素朴な農民の話であるという印象を持たせるためではない

か。それが本論文の問題提起である。

達意のドイツ語で書かれた本論文は，村山氏がグリム童話の意味を真に理解していること，文献学的緻密さを大事にする学者であることをあますところなく物語っている。

Soichiro ITODA: Nietzsches *Idyllen aus Messia*: Zu einer neuen kritischen Lektüre. (Ralph Häfner, Sebastian Kaufmann, Andreas Urs Sommer (Hrsg.): Nietzsches Literaturen. De Gruyter, 2019)

ニーチェの「メッシーナ牧歌」はニーチェの著作のなかでも知る人の少ない作品である。詩としてお世辞にも秀作とは言えず，そのため多くのニーチェ・ファンにも無視されてきたし，ドイツ語版の「ニーチェ著作集」にも収録されていないことが多い。

しかしこの論文にニーチェを読み解くための鍵が隠されていると本論文は大胆に主張する。ニーチェの全体像に通じた専門家でなければできない仕事である。

具体例を見てみよう。著者によれば,「メッシーナ牧歌」の最初の詩「プリンツ・フォーゲルフライ」はルー・ザロメに対するニーチェの秘めた愛情告白である。まずここから驚かされる。また「山羊飼いの歌」の副題は「私の隣人，シラクサのテオクリトスに」と題されているが，なぜテオクリトスなのか，疑念を抱いた読者も多いだろう。著者はその疑念を見事に晴らす。本論文によれば，ここにはキリスト教文明を批判し，ソクラテス以前のギリシアに戻ろうとする初期ニーチェの挑発的な目論見が現れている。その論証過程は見事であり，読んでいて血の騒ぐような思いがする。

著者は小さい部分のなかに隠された大きな全体を読み解き，それを文献学的・哲学的に仔細に論証する。部分から全体へといたる著者の手口は鮮やかであり，面白い推理小説を読んでいるかのようなスリルがある。文学的な深みと哲学的な深みが重なり合い，哲学と文学がここでは見事に相会している。哲学の根底に文学があること，文学がなければ哲学はできないことがよく分かる。文学研究が哲学者の生涯を読み解いた好見本のような良質の仕事である。

（文責：高橋義人）

受賞の弁　日本語論文部門

徳永恭子

この度は日本独文学会・DAAD 賞をどうもありがとうございました。オンライン授業や大学運営，そしてご自身のご研究にお忙しい中，査読や審査に携わって下さった委員の皆様には感謝の念がたえません。心から感謝いたします。

パンデミックで移動の自由が制限されている現在ですが，拙論は『ドイツ文学』158 号の特集テーマ「移動の文学―ネイションを超える文学」に寄稿したものです。クリストフ・ランスマイアーの『スラバヤへの道』を取り上げました。トラックでスラバヤへと向かう旅の軌跡を作家の文学的営為のアレゴリーとして読み解き，常に「移動」の途上にあることをランスマイアーの文学の特徴として捉えました。

思い返せば，私自身がランスマイアーの作品と初めて出会ったのも，「移動」の途上でした。オーストリアはグラーツでの留学を終え，日本に帰国する前に立ち寄ったドバイのパキスタン料理店で，注文をしたカレーを待ちながら，『氷と闇の恐怖』の最初のページを開いたのを覚えています。北極探検隊を描いた小説の凍りつくような極寒の世界とドバイの灼熱の砂漠が対照的で，強烈に記憶に残っています。インゲボルク・バッハマンに関する博士論文を提出し終えて脱力し，これから帰国して何をすべきかと悩んでいた時，ちょうど地理的・精神的トランジットの空間で出会ったのがランスマイアーでした。

コロナ禍で自由な「移動」ができない現在も彼の作品は「移動」とともにあります。勤め先の大阪から現在住んでいる徳島へ戻るには，鉄道が通っていないのでバスを使うしかありません。神戸を抜けると目の前に明るい海が広がります。明石海峡大橋を渡り，淡路島を通り抜け，大鳴門橋を渡る 2 時間のバス旅です。バスの中で読書をするわけにも行かず，車中では 70 を超えるエピソードがまとめられたランスマイアーの旅行記『臆病者の世界地図』を作家による朗読で聞いています。二つの吊り橋から眼下に見下ろす海に，地中海，カリブ海，アラビア海が重なり合います。この旅行記は海を越える通勤と帰宅に，他の世界へと「移動」する喜びを与え続けてくれます。考えれば，人生とは「移動」そのものなのかもしれません。「移動」の途上で出会い，さらなる「移動」へ向けて旅立つ人へ「いってらっしゃい」の声援を送りたいと思います。

（近畿大学教授）

受賞の弁　ドイツ語論文部門

村山功光

このたびは賞をいただき，とても光栄に存じます。審査に当たってくださった方々には厚く御礼申し上げます。

半ば学術資料として地味な体裁で世に出た『グリム童話集』は，第 2 版ではグリム兄弟の末弟画家ルートヴィヒ・エーミール作の絵が入るなどして〈家庭の本〉としての性格が強調されます。その一つがドロテーア・フィーマンの肖像で，以来この〈ヘッセンの初老の農婦〉こそが ― 有名な話を提供した上流市民層の若い女性たちを差し置き ― 〈グリム童話の語り手〉だと見なされてきました。

教養市民層の若い男性グリム兄弟は〈本物の民衆〉の女性に出会った衝撃を末弟にも熱く語り，彼女を写生するよう勧めます。そして，『童話集』序文ではフィーマンの容姿，記憶力や語りの精確さを称揚し，〈古来同じ生活を続ける民衆〉の異質性を美化します。スケッチ画とこの文章を基にして青年画家はエッチング版を発表していましたが，この絵が気に入った兄弟は『童話集』第 2 版の扉絵に採用するため，本に合わせて縦長で新たに制作させます。その序文では，4 年前に亡くなった語り手の描写に学術的・感情的な追記が施されています。曰く，ゲルマン人カッティー族が居住したヘッセンは山がちなため伝統的生活が保持されている，文字に頼らない記憶と口承の力はプラトンやカエサルも重視した，フィーマンは戦乱による貧困と病苦にさいなまれて死去した。これに呼応して肖像画は，手にはバラのつぼみとプリムラ（Schlüsselblume）が添えられ頭の背後には後光が差して，滅びゆく文化的記憶の継承者を追悼し〈聖別〉するに至るのです。

今までこの肖像には３種類あることすらあまり知られていなかったし，フィーマンを〈オリエンタリズム〉的視点から表象するグリム兄弟の言説と肖像画造形の相互作用が注目されることもありませんでした。図像の分析・解釈には不安があったため，シュテーデル美術館とフランクフルト大学の美術史家に原稿を読んでもらったところおおむね好評で，両人からは〈美術史家を買いかぶってはいませんか〉と言われました。図像学や図像解釈学には畏敬の念を抱いていただけにこの言葉には拍子抜けしましたが，他方で勇気づけられました。今回の受賞も励みに，グリム兄弟のイメージ的思考をもう少し追ってみようと考えています。

（関西学院大学教授）

受賞の弁　ドイツ語論文部門

井戸田総一郎

フライブルク大学ニーチェ研究センターのメンバーとの最初の出会いは，2015年10月に国際会議「ニーチェと詩」において『ゲーテに寄す』„An Goethe“をテーマに話した時のことである。フンボルト財団フェローとしてドイツに滞在していた2016年に，センター長であるAndreas Urs Sommer教授から’17/18年冬学期のRingvorlesungの一つを担当する依頼を受けた。その機会に作成した草稿が今回受賞させて頂いた論文の基になっている。

ニーチェの思索と書記行為にとって詩文（韻文）が極めて重要なものであるという認識は，近年のニーチェ研究では自明のことになりつつある。ニーチェの詩作を付随的・二次的行為とみなす見方は，詩文をニーチェ哲学の一翼を担うもの，あるいは詩と哲学の分離の状況を克服することがニーチェ哲学の核心である，というニーチェ研究者（Christian BenneやClaus Zittelなど）のメッセージによって掻き消されようとしている。私はヴァイマルのゲーテ・シラー古文書館に所蔵されているニーチェの手稿資料に取り組むなかで，言葉のリズムや響きの形成を通して一つの詩のなかに他のアフォリズムのテキストとの共鳴を生み出すことや，ゲーテやハイネなどの他の詩人の作品を取り込むことなど，ニーチェのさまざまな実験的な試みに出会い，そのたびにその頭脳の働き具合を追体験できるような気持になった。印刷されたテキストとは異なり，手稿資料にはニーチェの生々しい思索の痕跡が残されており，私はその痕跡からテキストが生成する過程に強い関心を持っている。痕跡のなかにはニーチェ哲学の核心に連なるものもあり，それらとの出会いは緊張感に溢れた何とも心地よい瞬間である。

『メッシーナの牧歌』„Idyllen aus Messina“については，アンナ・アマーリア図書館ニーチェ蔵書のなかの一冊，テオクリトスのギリシャ語・ドイツ語対訳本（J.A. Hartung 訳注，1858年）を参照にできたことが，新たな読解への導きになった。ニーチェによるページを折った跡や書き込みは，テオクリトスを「我が隣人」と名付けるほどの親密感の源泉に遡る読解の旅を可能にしてくれた。

私が雑誌『文学』に「誘惑の文体」と題した最初のニーチェ論を書いたのは，60歳を過ぎた時期であった。ニーチェは私にとって始めてまだ10年ほどしか経過していない若々しいテーマである。日本独文学会・DAAD賞に選ばれたことは，文体論・韻律論を中心にしたニーチェ研究の深化へとさらに歩を進める勇気を与えてくれるものであり，大変うれしく，審査に関わった方々に深く感謝している。

（明治大学名誉教授）

日本独文学会 2021 年春季研究発表会報告

2021 年春季研究発表会は 6 月 5 日（土）および 6 日（日）に東京大学本郷キャンパスで実施される予定であったが，新型コロナ感染症拡大をうけ，同日程で Zoom によるオンライン方式で開催された。1 日目の参加者は約 250 名，2 日目の参加者は約 190 名であった。非学会員の参加者は 18 名であった。

これまでの春季研究発表会と同様，1 日目の午前に総会が開催され，続いて日本独文学会・DAAD 賞授賞式，ドイツ語学文学振興会賞授賞式が行われた。また，昼よりドイツ語教育部会総会および講演会が開催された。研究発表会の内訳はシンポジウム 3 本，口頭発表 10 本，ポスター発表 1 本，ブース発表 1 本であった。口頭発表・シンポジウムと並行して，朝日出版社・郁文堂・三修社・第三書房・同学社・白水社・ひつじ書房各書店によるオンラインブースが設けられ，出版社によるプレゼンテーションがオンラインにて開催された。

（企画担当）

2020 年度ドイツ文化ゼミナール・オンライン代替企画報告

2020 年度ドイツ文化ゼミナールは，2021 年 3 月 14 日（日）から 16 日（火）まで，オンラインで開催された。講師は Hans Richard Brittnacher 教授（ベルリン自由大学)。Covid-19 の世界的蔓延のため 2020 年 3 月に予定していた第 62 回ドイツ文化ゼミナールは中止せざるを得ず，その代替企画として語学ゼミナールにならい，Online-Alternative を開催することとなった。方法はオンライン（遠隔同時双方向形式)，アプリケーションは Zoom を使用した。Online-Alternative では技術上の困難が大きすぎるため今回 Gruppenarbeit は実施せず，講演のみを行うこととした。

総合テーマ：Die Phantastische Literatur

参加者：

Hans Richard Brittnacher（Freie Universität Berlin)， Andreas Becker（慶応大学)，Stefan Buchenberger（神奈川大学)， *Marcus Conrad（名古屋大学)， 益敏郎（同志社大学)， 藤原美沙（京都女子大学)， 林英哉（京都大学)， 久山雄甫（神戸大学)， 池中愛海（慶応大学)， Alexander Imig（中京大学)， *磯崎康太郎（福井大学)， 金城朱美（富山県立大学)， 假谷祥子（神戸大学)， 小林英起子（広島大学)， 香田芳樹（慶応大学)， 粂川麻里生（慶応大学)， **桑原聡（新潟大学)，Michael Mandelartz（明治大学)， 松下たえ子， 宮島章子（立教大学)， 宮本寿樹（東京大学)， 宮本眞治（東京大学)， 水守亜季（南山大学)， 森口大地（京都大学)， 中村大介（慶応大学)， 二藤拓人（西南学院大学)， ***岡本和子（明治大学)， 大木滉平（東京大学)， 小﨑肇（広島大学)， André Reichart（福岡大学)，*Manuela Sato-Prinz（DAAD・慶応大学)， *Eberhard Scheiffele（早稲田大学)， Tobias Schickhaus（Universität Bayreuth)， Maria Gabriela Schmidt（日本大学)， *Thomas Schwarz（東京大学)， *下薗りさ（駒澤大学)， 杉山東洋（京都大学)， *須藤修平（福岡大学)， 高橋優（福島大学)， 高田梓（千葉大学)， 徳永菜摘野（早稲田大学)， *若山真理子（東京大学)， Johannes Wassmer（大阪大学)， 渡邉徳明（日本大学)

（アルファベット順， ***担当理事， **実行委員長， *実行委員）

総合テーマについて

Phantastische Literatur（「妖精物語」「幻想物語」「ゴシックノヴェルズ」「SF」等，広義のリアリズム文学に対立する概念として使われるが，日本語に対応する概念

がないので，原語を使用する）は，長らく文学研究において等閑視されてきた。phantastische Literatur は，文学研究がカルチュラルスタディーズの影響のもとに新しい視野を導入することによって徐々に重要な研究対象として認められるに至った。よく知られているように，phantastische Literatur，中でも妖精物語と幻想小説がドイツ・ロマン派および世紀末文学において好まれ，さらに 20 世紀に入るとSF が加わることとなった。

妖精物語の超自然の世界では奇跡と変身が不断に起こるのに対し，幻想小説における超自然の世界は，「内的統一に加わる亀裂」（R.カイヨワ）として現れる。これらの背後には驚異に満ちた「もう一つの世界・異界」に対する関心・憧憬，あるいは近代に入って顕著となる啓蒙主義の合理主義と自然科学的思考の普遍性志向に対する抵抗が想定される。なぜなら das Phatastische は現実世界の表層的堅固さを前提とするからである。それは意識下に蓄積された社会的・実存的不安，それを乗り越えようとするユートピア像などを梃子に発展する。das Phantastische の文化的多様性は現実の境界を軽々と越えていく。

この多様性は一方では文化的豊かさを提示すると同時に，研究にとっては定義の難しさを意味する。だがこの定義の難しさは必ずしも欠陥とみなされるべきではないだろう。phantastische Literatur は従来の語りでは十分に表現できない新しい事態—危機，不安，脅威，夢， 憧憬など—を描出しようとする努力を通じて新しい表現の可能性を与えようとする。本 Online-Alternative は，後期啓蒙主義から 21 世紀初頭に書かれたテキストの分析を通じ想像力の働きの多様性とその由来，さらには das Phantastische なるものが持ち得る独自の，批判と破壊のポテンシャルを提示し，解明しようと試みる。

3 月 14 日（日）

最初に文化ゼミナール実行委員長より今回の Online-Alternative に至った経緯と関係者に対する謝辞が述べられ, 続いて担当理事および DAAD 日本事務所代表により挨拶と感謝の言葉が述べられた。その後招待講師の講演で本企画がスタートした。

<u>Eröffnungsvortrag</u>

Hans Richard Brittnacher (Freie Universität Berlin): Der Abgrund der Wirklichkeit. Die düstere Anthropologie der Phantastik.

Literarische Phantastik の分類として Schauerphantastik，Science Fiction，Fantasy の三つの類型が示された後，特に Schauerphantastik の「恐ろしいもの」をあえて描き出そうとする特性が，通常見過ごされている人間の暗い側面に光を当てる

düstere Anthropologie として示された。それは扱うテーマやモチーフにおいてはもちろん，言語表現においても見出すことができる。その範例として E. T. A. ホフマン，メアリー・シェリー，グスタフ・マイリンクの小説作品が紹介され，詳細な解説がなされた。

Plenarvortrag I

Shoko Kariya (Universität Kobe):

Symbolistik der fremden Figuren. Die Bildung der poetischen Welt bei Novalis.

ノヴァーリスにおける Phantasie を他者像およびその象徴機能と関連づけて分析する本発表では，小説『青い花』のツーリマとマティルデの人物像がもつ，もう一つの世界と現実という二つの世界を仲介する象徴の機能が論じられた。

質疑応答では，水晶のモチーフやノヴァーリスの自我認識についての補足がなされたのち，人物像のさらなる解釈に関する発展的な応酬があった。

Mario Kumekawa (Keio-Universität):

Zur vielschichtigen Struktur der Phantastik in Goethes *Faust*.

ゲーテのモナド論的世界観を背景に戯曲『ファウスト』を世界の多層性ないし多元性の書として解釈する本発表では，登場人物たちが一つの世界ではなく各々の現実を生きていることがいくつかの場面の分析によって示された。

質疑応答では，発表で論じられた複数世界の境界やその邂逅の意味にも焦点を当てた議論がなされた。

3 月 15 日（月）

Plenarvortrag II

Stefan Buchenberger (Kanagawa- Universität):

Beschreibung des Unbeschreibbaren: H.P. Lovecrafts Cthulhu-Mythos und seine Adaption in den Graphic Novels von Alan Moore.

André Reichart (Fukuoka- Universität):

Der Wille zum Glauben – Wie ein Buch im Buch Wirklichkeit wurde.

H. P. Lovecraft (1890-1937) についての両者の発表では，異なる観点から Lovecraft の受容が取り上げられた。Buchenberger 氏の発表では，Lovecraft の「名状できないもの」が絵画の領域においてどのように具象化されてきたか，とりわけ Alan Moore がイラストレーターの Jacen Burrows とともに作り上げたマンガ（グラフィック・ノベル）においてどのように表現されているかが問題にされた。

他方の Reichart 氏の発表は，様々な直接的または間接的な受容例を紹介しなが

ら，あくまでもフィクションとして受け入れるポップカルチャーと，Lovecraft の描く世界を現実のものとするネオ・オカルト的な受容とがあると現状をまとめ，Lovecraft の受容が作品同様に現実とフィクションの合間にあると結論づけた。

質疑応答では，とりわけ Lovecraft の受容を巡って活発な議論が交わされた。

Natsuno Tokunaga (Waseda- Universität):

Deutschsprachige Science-Fiction 1875-1910: Vergessene Vorgeschichte des posthumanen Phantastischen.

徳永氏の発表では，最初にポストヒューマンの観点から，SF がいかにして Phantastische Literatur の系譜に連なるかが説明された。その後，例として，火星へ移住した人類と地球上に残った人類という二種類の人類が登場する Kurd Laßwitz (1848-1910): *Auf zwei Planeten*(1897)が取り上げられた。

質疑応答では Laßwitz の作品に関する質問をはじめとして活発な議論が繰り広げられた。

Tobias Akira Schickhaus (Universität Bayreuth):

***NACHTLEUCHTEN*. Traditionen und Innovationen Phantastischer Literatur.**

二日目の最後となった Schickhaus 氏の発表では, アルゼンチン出身の作家 María Cecilía Barbetta (1972-, 1996 年よりベルリン在住)の小説 *NACHTLEUCHTEN* (2018) が取り上げられた。ドイツ語で創作する Barbetta はドイツ文学における phantastische Literatur の伝統を踏まえたうえで, 南アメリカの歴史と現状を語るために das Phantastische がいまなお有用であるとしている。

質疑応答ではこれまでとは用法の異なる Phantastik の定義についてなど様々な質問が寄せられ，議論がなされた。

3 月 16 日（火）

<u>Plenarvortrag III</u>

Noriaki Watanabe (Nihon-Universität):

Diskurse über phantastische und unheimliche Körper im Kontext der Identitätsfrage.

フロイトの「不気味なもの Das Unheimliche」にまつわる論説を軸に E.T.A.ホフマンの『砂男』と三島由紀夫の『午後の曳行』を比較分析した本発表では，母親の不在が両作品の主人公の自己形成に与える影響が指摘され，主人公自身の観察者および共犯者としてドッペルゲンガーが持つ役割が論じられた。

質疑応答では，とりわけ『午後の曳航』における主人公の行為がエディプスコンプレックスによるものなのか，ホモセクシュアリティによるものかについて議

論が交わされた。

Daichi Moriguchi (Kyoto-Universität)

Die Angst vor dem Lebendigbegrabenwerden. Der Vampir als Scheintoter in Karl Spindlers *Der Vampir und seine Braut.*

19 世紀前半に活躍した大衆作家 Karl Spindler (1796-1855)による中編小説 *Der Vampyr und seine Braut* (1826)を扱った本発表では，作品発表当時の中央ヨーロッパ社会における「仮死」および「生きたまま埋葬されること」に対する非常に現実的な恐怖を体現する幻想的存在として吸血鬼が描かれていること，またその逆作用として吸血鬼が「仮死」という科学的説明によりその現実性を担保されていたことが紹介され，幻想文学と現実世界との関わり合いの構図が論じられた。

質疑応答では，ヴァンパイア・モチーフの由来とその消息，とりわけこのモチーフが 18 世紀末に下火になっていった理由についてなどに関して議論が交わされた。

Shinji Miyata (Universität Tokyo)

„Durch das Planlose Umherstreifen durch die planlosen Streifzüge der Phantasie wird nicht selten das Wild aufgejagt, ...“ Einige Bemerkungen zum Phantastischen bei Lichtenberg.

自然科学から文芸の領域までに及ぶゲオルク・クリストフ・リヒテンベルクの仕事にみられる「幻想・空想」 die Phantasie の定義と作用が論じられた。とりわけリヒテンベルクのアフォリズム的発想における「幻想的なもの」，すなわち非凡性や不思議さに特徴付けられる思考実験の構造，そしてテキスト断片を寄せ集めた彼の『雑記帳』の形式そのものが持つ「幻想的なもの」との親和性が紹介された。

<u>Freie Diskussion in Breakout-Räumen</u>

第一日目，第二日目の講演およびディスカッションの後，Zoom のブレイクアウトルーム機能を用い，最大 10 グループでの自由討論の場を設けた。実際には 5-6 人ごとの 3-4 グループに分かれていた模様。発表者に対する，全体討論には収まりきらなかった質問とそれに対する返答が中心であったが，それぞれの研究者の立場からのより詳細なコメントや，若手研究者の発言を他の参加者が好意的に促す場面も見られた。

Schlußdiskussion

Online-Veranstaltung の講演に関するもの，今後取り組むべきものについて活発に議論が行われた。phantastische Literatur が他のジャンルと区別される Merkmal に関する意見のほか，phantastische Literatur と現実との関係，Ethik との関係，文学以外のメディアにおける das Phantastische の研究が取り入れられるべきであるとの提案が出された。また今回は日本における das Phantasitsche について論じられることが少なかったこと，現代における SF についてもさらに論じられるべきといった意見が寄せられた。

Online-Alternative を振り返って

1）オンライン形式に関する所感

オンライン方式は今回初めてであり，当初スムーズな運営が可能か危惧されたところであったが，実行委員会委員の事前の準備のお陰で成功裏に終えることができた。以下に二三具体例を挙げる。

・今回の文化ゼミは，例年行われている Gruppenarbeit はなしで，講演を主体とする 3 日間の開催となったが，議論は充実し，初対面の参加者どうしの交流もできた。文化ゼミナール終了直後に取ったアンケート結果もこのことを裏書きしている。

・事前に，語学ゼミからオンラインゼミ実施時の詳細な報告を得ることができ，実行委員会でも入念に準備することができたため，当日の運営はスムーズにいった。通信トラブルや Zoom の操作に関する参加者側の問題もとくになかった。

・各日，プログラム終了後に自由に移動できるブレイクアウトルームを 10 個作り，懇親の機会としたが，これも非常によく機能した。参加人数に対して多めに部屋を設けたため，少人数での話も可能となったのもよかったと思われる。

2）Gruppenarbeit に関する所感

文化ゼミナールは従来，講演と Gruppenarbeit を二本の柱としてその相乗効果を期待してきた。今回は Gruppenarbeit を実施できず，講演主体の開催となった。主催者側としてはある程度予測できたことであったが，具体的なテクストに沿って議論する Gruppenarbeit によるテーマの深化ができなかった。そのため今回の代替企画はあくまで代替措置と位置づけられるべきであろう。今回の経験が教えてくれたのは，講演主体の開催には，従来の文化ゼミナールとは異なったコンセプトが必要であるということである。すなわち，講演を主体とするならば，総合テーマと各講演との関係，また，講演と講演との関係をさらに密とする工夫が必要であるように思われる。また，Gruppenarbeit は，とりわけ若手研究者をドイツ語に

よる討論に慣れさせる機会をも提供してきていたが，この機能についてはやはり対面方式が今後とも有益であるように思われる。だが，Covid-19 の感染状況によってはオンライン開催も考慮しなければならないだろう。そのためには開催形式にさらなる工夫が求められることとなろう。

（文責:桑原聡）

第 25 回ドイツ語教授法ゼミナール報告

第 25 回ドイツ語教授法ゼミナールは，2021 年 3 月 10 日から 13 日の日程で，オンライン会議システム Zoom を用いて開催された。今回の教授法ゼミナールでは，ビーレフェルト大学で教鞭を執る Uwe Koreik 氏を講師として招聘した。Koreik 氏はドイツ語教育学，とりわけランデスクンデ教育を専門としており，トルコの大学との学術交流も積極的に推進している。今回は招待講師として深圳技術大学の Peixin Xian (咸佩心) 教授もオンラインにて参加した。

今回は従来と異なり，オンラインでの開催であり，そのために Moodle と Zoom が用いられた。招聘講師を含む発表者はあらかじめレジュメと講演映像を Moodle にアップロードし，それをゼミナールの開始以前に参加者が視聴し，ゼミナールではディスカッションとグループワークが行われた。

また夕食休憩の際にはネット上に開設された wonder.me-Raum を利用して，参加者同士が自由に談話する場も提供された。

総合テーマ：「外国語としてのドイツ語の授業における歴史―言語を獲得し，視野を広げること」（Geschichte im Deutsch-als-Fremdsprache-Unterricht — Spracherwerb und Horizonterweiterung）

参加者：Bachmeier, Elvira（麗澤大学），Beier-Taguchi, Diana（東京学芸大学），別府陽子（大阪大谷大学），*Constantinescu, Cezar（明治学院大学），*Czyzak, Olga（麗澤大学），**Degen, Ralph（慶應義塾大学），藤本純子（北海道大学），Gunske von Kölln, Martina（福島大学），林明子（中央大学），Hendricks, Christoph（東京外国語大学），Hopf, Anja（新潟大学），堀口順子（九州大学），生駒美喜（早稲田大学），Imig, Alexander（中京大学），Kanematsu, Nina（上智大学），Kasai, Jannette（東京音楽大学），Kuklinski, Ruben（東京大学），*草本晶（麗澤大学），Lipsky, Angela（上智大学），丸山智子（Goethe-Institut Tokyo），村元麻衣（名古屋大学），那須妙子（那須弘一美術館），*Nickel, Frank（帝京大学），Niewalda, Katrin（獨協大学），***太田達也（南山大学），大野亘児（学生），Pogarell, Anneke（Matrin-Luther-Universität Halle-Wittenberg），齋藤正樹（早稲田大学），*Sato-Prinz, Manuela（DAAD Tokyo），Schmidt, Maria Gabriela（日本大学），Steger, Christian（Goethe-Institut Tokyo），杉谷眞佐子（関西大学名誉教授），須藤直子（明治大学），鈴木友美加（学生），*武井佑介（立命館大学），田中慈（院生），Vögel, Bertlinde（大阪大学），Weber, Till（琉球大学），Wölbling, Eva（東海大学），Yamaji, Mayu（院生）（アルファベット順，***担当理事，**実行委員長，*実行委員）

第 25 回ドイツ語教授法ゼミナール日程

Uhrzeit (Japan)	10.03	11.03	12.03	12.03
16-17	Begrüßung und Kennenlernen	Präsentation der Ergebnisse der Gruppenarbeit zu Thema 1	Präsentation der Ergebnisse der Gruppenarbeit zu Thema 2	Präsentation der Ergebnisse der Gruppenarbeit zu Thema 3
17-18	Diskussion Vortrag 1: „Geschichte und DaF“	Diskussion Vortrag 2: „Geschichte und Erinnerung“	Diskussion Vortrag 3: „Geschichte und Umwelt“	Diskussion der Referate der Teilnehmenden
18-19	Pause	Pause	Pause	Pause
19-20	Gruppenarbeit Thema 1	Gruppenarbeit Thema 2	Gruppenarbeit Thema 3	Vortrag und Diskussion Prof. Xian Peixin aus Shenzhen (China)
20-21				Abschlussdiskussion

1. 招聘講師による講演

招聘講師による講演はオンラインであらかじめ Moodle 上で提供され，参加者はゼミナールの開始以前にそれを視聴し，ゼミナールでは主にディスカッションやグループワークが行われた。講演のテーマは以下の通りである。

第 1 講演：歴史とドイツ語教育学 (Geschichte und DaF)

第 2 講演：歴史と記憶 (Geschichte und Erinnerung)

第 3 講演：歴史と環境 (Geschichte und Umwelt)

第 1 講演では，はじめに従来のランデスクンデ教育に代わる新しいアプローチが紹介された。Koreik 氏は C. Altmayer が提唱している談話能力 (Diskursive Kompetenz)に依拠し，ひとつのネーションや国に拘束された知識の伝達 (Landeskunde) ではなく，文化の学び，あるいは文化に関連付けられた学びを重視する。その際に対象となるのは，外国語における意味の付与と意味の交渉の談話的なプロセスである。外国語教育の目的とは，外国に関する事実もしくは文化的知識の獲得ではなく，談話への参加能力であり，それによって外国語で談話的な意味の付与と交渉の過程に参加する事であ

る。談話に参加する能力や可能性を育むことによって，学習者はグローバルな相互作用への能力や可能性が育まれる。そうして，外国語の知識はグローバルな市民という意識への発展の重要な寄与となる。

その際，近年のトランスナショナルな歴史研究やグローバル史の発展により，すでに時代遅れの概念と思われている「ネーション」という概念が，移民社会になっているドイツの現実を受け，学校教育においてはある特定のネーションへの帰属感情が極だった重要性を持つ事が指摘される。ここでフランスの P. Nora の研究を嚆矢とする「記憶（想起）の場」研究の成果をドイツ語教育へ応用する方法が紹介される。記憶の場とは，文化的な知識の重要な結晶点として，そして社会的なディスコースが凝縮する結節点として理解される。批判的な国民的自己理解の範囲において，ダイナミックで学びやすい記憶の場というコンセプトが学校においては求められている。

ランデスクンデの授業には通常はすでにある程度の目的言語の言語能力が必要であり，またある歴史的なテキストを理解する際の背景知識も必要とされる。ランデスクンデで扱われる歴史的なテーマは，ある価値が持つ歴史性も含めて，過去，現在そして未来の関係性，そして様々な価値観に関する情報を説明するものである必要がある。異なった文化に関する学問は，歴史に関する基礎的な理解を欠いては空虚なものになると Koreik 氏は強調する。

価値の歴史性への検討の例として，Koreik 氏は，第一次世界大戦の勃発の責任に関する論争を取りあげる。ドイツの歴史家 H. A.Winkler の発言を援用しつつ，Koreik 氏は，現代社会がなぜ生まれてきたのか，なぜ私たちの歴史はこのようなものであり，別様には発展しなかったかを問わねばならないと述べ，さらに学習者は知識を詰め込むのではなく，歴史的な諸関係を認識し，個別の出来事をより大きなコンテキストに位置づける能力を身につけねばならないと言う。その際に重要なのは同時代の人びとの動機，行動の余地，それらの人びとの代わりの可能性を問うような問題の理解の仕方である。このような歴史との取り組み方によって，私たちは現代の課題に対応できる。

ランデスクンデの授業での歴史的な内容の伝達への要求は，単なる知識の獲得ではなく，言語的に適切で，自律学習を促し，目的言語あるいはドイツ語で，現代の事柄に関連する現象の理解を容易にする。

歴史学は，政治史や経済史，社会史，日常史，メンタリティーの歴史，概念史，環境史，ジェンダーの歴史，技術史，記憶の歴史，集合的記憶 (Kollektives Gedächtnis) ，グローバル史など多様な領域に発展しており，Koreik 氏はその中でも記憶の歴史に注目している。

授業における実践例として，Koreik 氏は，17 世紀に信仰上の理由でフランスを追われたユグノーのブランデンブルク辺境伯領への受入れを挙げる。また歴史的な神話や伝説といったものを扱う重要性が言及されている。そうした神話としては，1933 年のナチ

の政権獲得，さらに戦後西ドイツの経済の奇跡が取りあげられ，そうした出来事へのランデスクンデの授業での取り組みも紹介された。

第 2 講演では，歴史と記憶の問題が検討された。はじめにフランスの歴史家 P. Nora の「記憶の場」の構想が紹介される。ここで言う記憶の場とは実際の場所でも良いし，実在しない想像された場でも良い。Nora は出来事や記念碑，記憶，そして心理的な根本的経験の意義を強調する。その後，ドイツでは「記憶の場」というよりは国に特定されない「記憶の文化」という概念が一般的に用いられている。ここでは集合的記憶の発生とその変化が分析され，そしてアイデンティティの確立に寄与する機能が重要とされている。集合的記憶は数十年間で忘れられてしまうが，アイデンティティの確立に寄与し，受容する価値があり，授業で学習しやすく提示することが求められている。

このようなテーマの例として，ホロコーストと西ドイツの「経済の奇跡」が挙げられる。ホロコーストに関して言えば，西ドイツの戦犯裁判で活躍したヘッセン州の主席検事フリッツ・バウアーに関して近年放映された映画が紹介され，それぞれの映画におけるバウアーの扱いの相違が示された。バウアーは戦後西ドイツのいわゆる「過去の克服」を考える際に欠かせない人物である一方で，時代によってその評価は変ってきた。経済の奇跡については，経済の奇跡とされている問題においては西ドイツでの第二次世界大戦中と戦後の生産力の比較など，様々な歴史的条件を検討すると，必ずしも奇跡といった事柄ではないと指摘されている。

第 3 講演では，私たちや学習者にとって身近なテーマとしての環境の歴史とドイツ語教育との関わりが論じられた。環境史は第 1 講演でも挙げられた歴史学の一分野であるが，人間とその他の自然との間の歴史的な相互作用に着目する領域であり，それによって，人間は自然に対峙しているのではなく，自然と共に活動するエコシステムの一部であることが強調される。その歴史的な関係性やその展開を調べ，明らかにするのが環境史である。その際，自然災害や気候変動は人類全体に影響を及ぼすものであり，また伝染病も昔から記録されてきた。環境史はますます地域的なものからグローバルな現象として研究されており，現在では歴史学の一部門として確立されている。環境の歴史をめぐるディスコースを決めるテーマとして，大気汚染や水質汚染が挙げられ，1980 年代には西ドイツでは環境問題がドイツ語の教科書のテキストのテーマになる。現在では様々な教材で環境問題がテーマになっていることが示される。

第二のテーマとして原子力の問題，温暖化問題が挙げられ，歴史学の一部でもある事が示唆される。さらにドイツの環境史の先駆者である J. Ratkau の研究に依拠しつつ，ドイツにおける環境史の発展が辿られる。

環境史において極めて重要なテーマである自然災害は国民国家を超えるグローバル

な現象でもあった。一例として，インドネシアのタンボラ山の噴火が北半球の気候に影響与えた結果，ドイツで飢饉が起き，「夏がない」年であった 1816 年と翌年には海外への移住者のピークを迎えたことが紹介される。当時はまだアメリカ合衆国に移住した者は多くはなく，もっぱら人びとはドナウ川を下り，南ロシアやカザフスタン，アゼルバイジャンにまで移住したのであった。

2 つ目の事例としてライン川が挙げられ，古代ローマ時代，都市の建設，神話，国民的シンボルとしてのライン川，環境保護の対象としてなど様々な側面からランデスクンデの対象となることが指摘される。

2. グループワークとその結果報告

今回のゼミナールでは招聘講師とのディスカッションのあとで，グループワークが実施され，参加者それぞれの関心から今回のゼミナールのテーマに即した実践活動が検討された。オンラインでの開催ではあったが，ゼミナールの開催時間外でも Zoom 等を利用して，ディスカッションをし，グループワークの結果報告を準備したグループもあった。グループワークのテーマは招聘講師から与えられた。テーマは主に日本の教育現場への応用，レベルに応じた実践のあり方という観点から出され，多くの実践例が提起された。その中にはドイツの歌謡で日本にも移入された歌謡を用いた授業例など，必ずしも高い語彙の知識を必要としない実践例もあり，幅の広い議論と情報共有が行われた。

3. 招待講師と参加者による報告

最終日の夜に中国からの招待講師である Peixin Xian 氏による講演が行われた。報告のタイトルは，VR-Spiel im DaF-Unterricht であり，ヴァーチャルリアリティ (VR)を用いたドイツ語授業に関して報告がなされた。Xian 氏はドイツ語教育学，とりわけインターアクション仮説に基づいた言語習得を専門とされ，現在の職場である工科大学で理系の研究者と共に VR を用いた学習環境を構築している。ここでは世界遺産にもなっている古代中国の都市が再現され，学習者はその仮想都市で他の人びととドイツ語でコミュニケーションを取り，歴史に関する情報や表現をはじめ日常的な表現を学ぶことができる。何かを協力して行うようなタスクもゲームの中で実行することができ，学習者同士での学びも行えるよう配慮されている。学習者は大学の端末を用いて，それらのゲームにアクセスし，課題を実行していく。VR 技術によって過去の都市を再生し，そこでドイツ語を用いることは学習者にも興味深いだろうし，協働学習のきっけかにもなると思われる。

また今回はあらかじめゼミナールの前に Moodle 上に参加者による発表の動画がアップロードされ，参加者はこれらの動画をゼミナールの前に視聴した。ゼミナールの開始前にすでに参加者と発表者の間で Moodle を利用して活発な議論がなされた。発表

のタイトルは以下の通りである。

- Alexander Imig：Erinnerungskultur im Film
- Nina Kanematsu：Kinder- und Jugendliteratur zum Thema „Holocaust“
- Maria Gabriela Schmidt：Nicht nur Essen und Reisen
- Christian Steger：Erinnerungsorte der Migration im Film „Maria, ihm schmeckts nicht!“
- Bertlinde Vögel：Die psychischen Langzeitfolgen der Weltkriege

4. 総括

冒頭に記したように今回のゼミナールはオンライン開催となり，従来のゼミナールの形態とは大きく変わった。あくまでも参加者の視点であるが，ゼミナールの開始前に招聘講師並びに参加者による報告を視聴するようになったことが最も大きな変更点であった。参加者に明示されてはいないが，結果的に「反転授業」のような形式で今回のゼミナールは実施された。「反転授業」では教場での議論や共同作業が重視されるが，今回のゼミナールでもその試みはうまく行ったと感じられたし，今後のゼミナールのあり方のひとつのモデルにもなるだろう。

ランデスクンデは今後ますます発展するであろうオンライン化の流れの中で，多くの可能性を秘めた領域である。今回のゼミナールではその専門家の方たちから多くの示唆を得，その理論と実践例を知ることができた。その一方で，日本で授業を実施するにあたって，日本の実情に合わせたランデスクンデ教育のあり方についても考えさせられた。参加者による報告にもそれを強く意識した報告があり，筆者も今後の糧としたい。

ランデスクンデはすでにドイツ語教育の一部分となって久しいが，今後はより歴史学の知見や成果を取り入れたランデスクンデ教育が実現されることを願いたい。今回は新型コロナウイルスによる，いわゆる「コロナ禍」でのゼミナールの実施になったが，実行委員会の努力に感謝し，一刻も早くこの感染状況が収束することを願って筆を置きたい。

なおゼミナールの実施にあたっては，昨年と同様にドイツ学術交流会（DAAD）から多大な支援をいただいた。この場を借りて御礼を申し上げたい。

（文責：齋藤正樹）

2020 年度ドイツ語教員養成･研修講座報告

1. 本講座の運営について

ドイツ語教育部会，東京ドイツ文化センターとの共催で開催している「ドイツ語教員養成・研修講座」は，2019 年 10 月から慶應義塾大学日吉キャンパス（関東会場）と甲南大学岡本キャンパス（関西会場）の 2 会場をテレビ会議システムで結ぶかたちで行っている。なお，今期から Zoom により会場外からの参加も可能となっているが，コロナ禍の影響により，2020 年 4 月以降のすべてのワークショップを Zoom により開催している。受講者は，ワークショップへの参加に加え，各モジュールのテーマについてレポートを作成し提出することが求められる。また，専用のプラットフォームである Moodle 上では，受講者同士，また受講者と講師の間でドイツ語教育をめぐるディスカッションが展開され，受講者・講師双方にとって，ドイツ語教育について再考する刺激的な議論の場となっている。

2. 2019 年秋開講のコースについて

2019 年秋開講のコースは，前期が 2019 年 10 月から 2020 年 7 月までの 8 回のワークショップで 7 モジュール，後期が 2020 年 10 月から 2021 年 9 月までの 8 回のワークショップで 4 モジュールならびに *Deutsch Lehren Lernen 4*（以下 DLL 4）の課題，計 11 のモジュールからなる。後期コースには 14 名（関東会場 8 名，関西会場 6 名）の受講者が参加し，2021 年 2 月の時点で第 4 回ワークショップまで終了した。

後期コースのワークショップ開催日，モジュールのテーマならびに講師は以下のとおりである。

後期コース（2020 年 10 月—2021 年 9 月）

ワークショップ	日付	ワークショップとモジュールのテーマ	
		前半	後半
1	10 月 10 日	外部講師による講演	**M8**: 様々なメディアと ICT の導入 境一三，岩居弘樹
2	11 月 14 日 11 月 15 日	DLL 4 導入ワークショップ Monika Haas	
3	12 月 19 日	M8 のレポートの評価と討論	**M9**: テストと評価 太田達也，坂本真一
4	1 月 30 日	M9 のレポートの評価と討論	DLL 4, PEP の準備 Monika Haas
5	4 月	DLL 4, PEP の準備	**M10**: 動機づけと意識調査 藤原三枝子，吉村創
6	5 月または 6 月	Praxiserkundungsprojekt (PEP) プレゼンテーション	
7	7 月	M10 のレポートの評価と討論	**M11**: カリキュラムとシラバス 草本晶，松岡幸司
8	9 月	M11 のレポートの評価と討論	講座の総括

日本独文学会研究叢書既刊一覧

2020 年春季研究発表会が開催中止となったことに伴い，この間は叢書の刊行がなかった。

支部報告

北海道支部

第 1 回幹事会（4 月 14 日［水］: オンライン）
〇役員の選出について
支部長：鈴木純一
支部選出理事：鈴木将史
幹事：北原博，寺田龍男，西村龍一，中村寿，熊坂亮，阿部和夫，藤本純子

第 2 回幹事会（6 月 16 日［火］: オンライン）
〇北海道ドイツ文学会　総会・第 89 回研究発表会について
7 月 17 日（土）に予定されていた研究発表会に関して，申し込み締め切り日を過ぎても，正式に発表申込がなく，協議の結果，今回は開催を見送ることとした。また, 以前から話題となっていた年2回開催から年1回開催への変更に関しては, 次回の幹事会で協議し，その方向で進める場合は総会に付議することとした。

〇次回の冬の北海道ドイツ文学会　総会・第 89 回研究発表会について：
開催日を，12 月 11 日あるいは 18 日を軸に調整することとした。

〇会員数：61 名（2021 年 7 月 31 日現在）

東北支部

〇2020 年 11 月 28 日（土），会議アプリケーション「Zoom」を使用し，オンラインにて東北ドイツ文学会第 63 回研究発表会および総会が行われた。
研究発表者・題目
1. 狩野徳洋「クライスト『聖ドミンゴ島の婚約』における光と闇の対比」
2. 川村和宏「オンライン授業を活用した対面授業の再構築―教科書解説動画の配信による反転授業の試みについて―」
3. 嶋﨑啓「ドイツ語における未来形の現在時の推量用法と話法の助動詞の認識用法の通時的展開」

〇第 64 回研究発表会は，2021 年度は日本独文学会秋季研究発表会開催に伴って開催を見送り，2022 年度秋季に開催予定。

○2021 年 3 月 20 日，機関誌『東北ドイツ文学研究』No.61 を刊行した。
執筆者・論文
1. 橋本由紀子「衣服交換と命の更新―ヤーコプ・ビーダーマン『殉教者フィレモン』について―」
2. 竹内拓史「父から受け継いだもの受け継がなかったものーエルンスト・ビューヒナーの鑑定書及びそのゲオルク・ビューヒナーへの影響の考察」
3. 庄司知記「「城」へ架ける橋ーフランツ・カフカ『城』における「視点」の問題」
4. 小原森生「祖国オーストリアはどこにあるのかーヨーゼフ・ロート『ラデツキー行進曲』に見られるオーストリアの様相」
5. 渡辺美奈子「ヘンリーツィ（ピカンダー）とバッハ『マタイ受難曲』」
6. 田中岩男「節蔵（『灰燼』）とメフィスト，あるいは「ニヒリズム」の行方ー鴎外と『ファウスト』（その四）」
7. 斎藤成夫「ミュトスの衣装をまとった近代悲劇ー他者の欲望としてのヘッベル『ギューゲスの指輪』」
8. 森本浩一「批評と文学的経験」

○会員数 86 名（2021 年 8 月 20 日現在）

北陸支部
○2021 年 2 月に『ドイツ語文化圏研究』第 17 号を発行した。

関東支部
○2021 年 7 月 4 日（日）に Zoom にて総会が行われ，新幹事会（任期 2 年）が正式に発足した。分掌は以下の通り。
支部長　境　一三
支部選出理事　浅井　英樹
庶務　江口　大輔，山本　潤
会計　桂　元嗣
広報　日名　淳裕

○2021 年 12 月 12 日（日）に第 12 回関東支部研究発表会を Zoom によるリアルタイム配信で行う予定。現在発表者を募集中（締め切りは 9 月 30 日（木））。詳細

は関東支部ホームページを参照のこと。

東海支部

〇2021 年度日本独文学会東海支部夏季研究発表会
日時：7 月 10 日(土曜日)　14 時より
場所：ビデオ会議 zoom を用いたオンライン会議
研究発表：
1) 中野英莉子：ドイツ語付加疑問詞 oder, ne, ja, gell が果たす相互行為的機能についての一考察
2) 村元麻衣：オンラインドイツ語授業のための授業時間外補足ツールについて
講演会：
細井直子：ソーシャル・トランスレーティング
—オンライン・プラットフォームを利用した新しい文芸翻訳のプロセスについて

〇2021 年秋に，機関誌『ドイツ文学研究』第 53 号を発刊予定

〇2021 年度総会・冬季研究発表会の開催について
12 月 11 日(土曜日)を予定しているが, 形態をオンラインにするかどうかは継続審議

〇会員数　108 名　（2021 年 7 月 10 日時点）

京都支部

〇2020 年度秋季研究発表会・総会（WEB／リモート開催）
視聴・閲覧期間：12 月 5 日（土）10: 00～12 月 12 日（土）12: 00
WEB 発表研究会会場：https://jggkyoto.org/meetings.html
要旨発表・質疑応答／総会／役員選挙（Zoom 開催）: 12 月 12 日（土）13:30 より
当日参加者：約 20 名（総会・選挙の事前投票は 18 名）
研究発表：
1. 古英語と古ザクセン語における時を表す副詞的格の用法の比較
－特に Tag と Nacht を中心に－　　【動画方式】
中西志門（京都大学大学院生）
2. カフカの作品における写真と映画　　【PDF 方式】

山口知廣（近畿大学非常勤講師）

総会：2019 年度決算報告と 2020 年度予算案，各委員報告

〇2021 年春季研究発表会（リモート開催）
開催日時：2021 年 7 月 10 日（土）13：30～17：00
参加者数：49 名
研究発表：
1. メランコリー論として見る初期フロイトの歩み
——「躁的防衛」から「投影性同一視としての喪の仕事」へ——
網谷優司（京都大学大学院生）
2. ヴィラモヴィアン語における接続詞と人称代名詞との融合
についての一考察
下村恭太（京都大学大学院生）
3. 日本人ドイツ語学習者のディスコースマーカー使用傾向
——ドイツ語会話内で出現する日本語 DMs 分析——
武井佑介（立命館大学）

〇2021 年度秋季研究発表会・総会は 11 月 20 日（土）に開催予定。

〇学会誌『Germanistik Kyoto』について
2000 年より年 1 回刊行。2021 年 9 月頃に第 22 号刊行予定。

〇2021 年度支部役員
支部長：今井敦（龍谷大学）
支部選出理事：吉村淳一（滋賀県立大学）
編集委員：金子哲太（京都外国語大学），藤原美沙（京都女子大学）
渉外・広報委員：宇和川雄（関西学院大学），高岡智子（龍谷大学）
会計委員：麻生陽子（大谷大学）
庶務委員：児玉麻美（大阪府立大学），筒井友弥（京都外国語大学）

〇会員数：145 名（2021 年 8 月 20 日現在）

阪神支部

〇2021 年 3 月 25 日に機関誌『ドイツ文学論攷』第 62 号（全 58 ページ）を発行した。掲載論文は以下のとおり。

・大杉奈穂：　南と東の合一：ヘルマン・ヘッセ『クリングゾルの最後の夏』について

・熊谷哲哉：　ラファエル・フォン・ケーベルとカール・デュ・プレル：明治期日本に伝わったドイツの心霊主義について

〇第 71 回総会・第 234 回研究発表会

日時： 2021 年 4 月 10 日（土）13:30～

場所： 関西大学　千里山キャンパス　５号館　E603 号室

参加者： 29 名

総会

1) 幹事諸報告：庶務，会計，編集，企画，渉外，支部選出理事

2) 審議事項：

・2021 年度予算について

・日本独文学会の一般社団法人化に伴う阪神ドイツ文学会規約の改正について

3）役員選挙：会長選挙・幹事選挙

研究発表会

1）假谷祥子（神戸大学大学院博士後期課程）：ポエジーと形象化－ノヴァーリスにおける象徴概念をめぐって

2）山田真実（関西学院大学大学院博士後期課程）：日本人ドイツ語学習者の母語がドイツ語作文に及ぼす影響－２種類の作文の比較から

〇第 235 回研究発表会

日時： 2021 年 7 月 17 日（土）13:30～ （オンライン開催）

参加者： 50 名

研究発表会

1）佐藤文彦（金沢大学）：父の世界を継ぐ娘　ナチス少女文学が生まれるとき

2）山本賀代（慶應義塾大学）：ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代，あるいは諦念の人々』の成立事情

3）橘宏亮（大阪大学）：制御される自然　クライストの『ヘルマンの戦い』におけるトゥスネルダの熊について

〇2021 年 8 月 19 日現在の会員数は 222 名

中国四国支部

〇2020 年 10 月 23 日　機関誌『ドイツ文学論集』53 を発行した。

論文

1. Anette Schilling: Ulrich Plenzdorf: *Die neuen Leiden des jungen W.*
   －Vorschläge zur Bearbeitung des Romans im Deutsch-als-Fremdsprache-Unterricht
2. 渡辺 将尚：抑圧されたアイデンティティ ― 反フィッシャー論者の言説から見た「フィッシャー論争」
3. 杉林 周陽：正気を失わせる音楽の魔力
   クライストの『聖ツェツィーリエ』における「伝説」の諸相
4. Akira HOTTA: Klassizismus und Modernitätsbewusstsein in der deutschsprachigen Erzählliteratur zu Beginn des 20. Jahrhunderts

〇2020 年 10 月 31 日　広島大学において Zoom によるオンライン形式で中国四国支部第 69 回総会ならびに研究発表会を開催した。参加者 28 名。

幹事会（11:00～12:00）

総　会（13:00～13:30）

1. 支部幹事・役員交替について原案のとおり承認した。

   役員・幹事（2020 年 11 月より）

支部長	最上 英明（香川大学）
支部選出理事	井戸 慶治（徳島大学）*2021 年 6 月より
地区幹事	【四国】松尾 博史（松山大学）
	【岡山・鳥取】由比 俊行（岡山大学）
	【広島・島根】今道 晴彦（広島大学）
庶務	斎藤 昌人（高知大学）
編集委員会	［委員長] 松尾 博史（松山大学）
	[副委員長] 黒田 晴之（松山大学）
会計	伊藤 亮平（松山大学）

2. 決算および予算について原案のとおり承認した。
3. 2021 年，2022 年および 2023 年の支部幹事会・総会・研究発表会は，それぞれ愛媛地区，岡山地区，徳島地区での開催に向けて調整を進めることが確認された。

研究発表会（13:40～16:00）

（司会：小林 英起子／古川 昌文）

1. 川野 正嗣：自動車に乗った聖人？― エルンスト・ユンガーにおけるモデルネの宗教
2. 木田 綾子：ヴィーラントと世界文学
3. 伊藤 亮平：ナイトハルトのリートにおける老年期のモチーフについて
4. Hans-Michael Schlarb: Facetten des Ressentiments in Fontanes *Cécile*

〇2020 年 10 月 1 日現在の会員数は 84 名＋賛助会員 5 社。

西日本支部

〇2021 年 11 月 27 日（土） 西日本支部第 73 回総会ならびに研究発表会をオンライン会議形式にて開催予定。

〇機関誌『西日本ドイツ文学』第 33 号の編集作業が進行中。（今秋発行予定）

〇インターウニ西日本は昨年度に引き続き中止。

〇九州ドイツ語暗唱コンテスト 2021 年（協賛）

Deutschsprachiger Rezitationswettbewerb in Kyushu 2021

投稿〆切：2021 年 10 月 3 日（日）

オンライン開催

ドイツ語教育部会報告

1. 総会

2021 年日本独文学会春季研究発表会（会場：オンライン開催）に合わせ，2021 年 6 月 5 日（土）にドイツ語教育部会 2021 年度総会（オンライン）が開催された。議題は以下の通りである。

I　報告事項
　1.　2020 年度活動報告
　2.　その他
II　審議事項
　1.　2020 年度決算報告
　2.　2021 年度予算について
　3.　監事嘱任について
　4.　その他
III　会員からの意見開陳

「II 審議事項」の「2.　2021 年度予算について」は，原案通り承認された。また，「3. 監事嘱任について」では，2020 年度の監事 2 名（西川智之氏，松岡幸司氏）のうち西川智之氏の任期が満了となったため，2021-2023 年度幹事として吉満たか子氏が推薦され，承認された。

2. 部会長

清野幹事とともに，2021 年 7 月 29 日にオンラインで開催された IDV-Vertreter*innenversammlung に参加した。このときに行われた幹事選挙にあたっては，選挙管理委員を務めた。

3. 編集

『ドイツ語教育』第 26 号を（2022 年 3 月発行予定）の編集作業を開始，フォーラムは「自動翻訳とドイツ語教育（Automatische Übersetzung im Deutschunterricht）」というテーマで組んでいる。

4. 企画

2021 年 6 月 5 日（土）に Zoom にて教育部会主催講演会（13:25～14:25）およびワークショップ（14:40～15:40）をオンラインで開催した。

テーマ :「初等中等教育における多言語教育実践の成果と課題 : 複言語教育に向けて 」

講　師　: 吉村雅仁氏（奈良教育大学）

5. 大学入試問題検討委員会

2021 年日本独文学会春季研究発表会 1 日目と 2 日目に予定していた 2021 年度大学入試問題の展示は，学会がオンラインで開催されたことに伴い，実施が困難であり，中止とした。

6. ドイツ語教員養成・研修講座

日本独文学会および東京ドイツ文化センターとの共催で開催されている「ドイツ語教員養成・研修講座」は，2019 年 10 月より関東会場（慶應義塾大学日吉キャンパス）および関西会場（甲南大学岡本キャンパス）を会場として開催されている。参加者は関東会場 10 名，関西会場 8 名である。

ただし，2020 年 4 月のワークショップからは，コロナウイルス感染拡大のため，暫定的に Zoom によるオンライン開催となっている。

2021 年 9 月に今期講座が無事終了する予定である。

会員数（2021 年 8 月 19 日現在）は，正会員 448 名，準会員 68 名，賛助会員 10 団体の計 526 名／団体である。

（文責　境一三）

2021 年度岩﨑奨学金（出版助成）について

2020 年度に岩﨑奨学金は，若手研究者のための出版助成に改定されました。2021 年度は，申し込みがありませんでした。

なお，岩﨑奨学金（出版助成）の概要は，下記のとおりです。

【奨学金の趣旨】

日本独文学会は，故岩﨑英二郎先生のご遺族からいただいた寄付金で「日本独文学会岩﨑奨学金」を創設し，若手研究者の育成のために国際学会の発表に対しての奨学金を支給してきましたが，必要とされている援助を行うという観点から，この度より若手研究者の研究成果公開のための奨学金制度へと改定することになりました。

【奨学金の概要】

1. 博士論文の出版に際して，テニュア職を持たない会員に対して，30 万円を上限に出版費用の助成を行う。
2. 奨学金の支給は年度総額の上限を設定する（2020 年度については 60 万円）。また，同一会員への支給は 1 回のみとする。
3. 募集は年度毎に行い，日本独文学会ホームページその他の手段で会員に広く公示する。
4. 奨学金は 2020 年 4 月より募集を開始する。
5. 奨学金の返済の義務はない。ただし，支給後に，申請対象の研究書の出版を中止した場合，受け取った奨学金を返還するものとする。
6. 他の出版助成を受けることは可能であるが，本奨学金と合わせて出版費用を超えないこと。
7. 奨学金を受けようとする者は，決められた書式の申請書類を日本独文学会事務局に提出する。
8. 審査は日本独文学会常任理事会内に設けた審査委員会が行う。審査委員会は，外部の専門家に審査を依頼することができる。審査の結果適当と認めた場合，奨学金を支給する。
9. 奨学金の原資を使い切った時点でこの事業を終了する。また，事情により，予告なしにこの事業を終了することもある。

【募集人数】
各年度 2 件〜3 件程度。

【応募資格】　以下の条件をすべて満たす者。
1. 日本独文学会員。
2. テニュア職を持たない者。

【応募方法】
1. 下記の必要書類を日本独文学会事務局へ郵送する。a）と b）に関しては同時にファイルを電子メールで hojo@jgg.jp 宛に送付する。
2. 応募締め切り：毎年 6 月 30 日
   a) 奨学金申請書（3 種類），書式（3）
   b) 原稿
   c) 誓約書
   d) 博士論文の審査に合格したことを証明する文書

【選考方法】
1. 提出された申請書を日本独文学会常任理事会で審査する。
2. 必要に応じて，審査委員会外の専門家に審査を依頼することがある。
3. 申請から 3 ヶ月程度で申請者に採否を通知する。

あとがき

「ニュースレター」2021 年秋号（Info-Blatt 第 5 号）をお届けします。各種のご報告ならびにご案内をお寄せいただいた皆様，ありがとうございました。引き続き，学会内での情報共有に向けてご協力いただければ幸いです。どうぞよろしくお願いします。

庶務担当理事　高橋亮介

編集
一般社団法人 日本独文学会庶務委員会
　井出 万秀（委員長）
　大野 寿子（編集担当）　高橋 亮介（編集担当）　中野 英莉子（編集担当）
　西尾 宇広（編集担当）　馬場 大介（編集担当）　藤縄 康弘（編集担当）

編集・発行
一般社団法人　日本独文学会
170–0005 東京都豊島区南大塚
3–34–6 南大塚エースビル603
電話03–5950–1147
振替00160–9–135018
E-Mail（メールフォーム）：
http://www.jgg.jp/mailform/buero/

ニュースレター2021 年秋号
JGG-Info-Blatt / Herbst 2021
2021 年 9 月 15 日発行